明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百六十一號

明治二十七年一月六日發兌

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百六十一號目錄

女學雜誌毎週發行廣告

天道　人情　神仙

女學雜誌はもと毎週一度の發行なりしを、別に「文學界」を生み、又「評論」を分ちしより、隔週發行にあらためて、月に大抵、二度づゝと限りたるを、多年の知己は、物足らぬ心地すとて増刊をすゝめ玉ふと少しとせず。よりて、今春より、元の如く毎週土曜日の發行とし、大率ね、左の諸欄をかわる〴〵入れちがえて掲載せんとす。

社説	史傳	兒籃	
女學	隨感	つれ〴〵草	
小説	書架	文くらべ	家政
叩扉	問答	雜錄	逸事
統計	文藝	理學	
時報	論説	寄書	

一册の定價元の如し
東京神田表神保町六番地
女學雜誌社書店

高潔　確信　自修

慈悲　博愛　義俠

書籍新刊預告

女學雜誌社近刊書籍預告

ウイラード自叙傳

世界婦人禁酒會頭フランセス、ウイラード女史が、自から流麗の才筆を揮ひて、自己の生ひ立ち經歴を記したる自叙傳を、簡潔に、有益に譯述したる新書近刊せられんとす

俳諧史傳

「評論」紙上に芭蕉を論評し、一時文壇を驚ろかせたる二文士、俳諧の幽元をさぐり、天才を傳へ、秀吟をひろひ、脈々たる其史線をさぐりて茲に未だ曾て有らざる精細確實なる俳諧史傳を叙したるもの、近刊せられんとす、

淺瀬之波 第二集

池袋清風先生社中の吟咏は特色あり、天味あり、ことに其教授點削の法、尋常ならざるより、錦腸迅速に發達す。曩に社中の咏を集めたるものゝ第一は世の好評をうけたり、今ま其第二集近刊せられんとす

文部省普通學務局
學校衞生事項取調囑託醫學士三島通良先生著

學校衞生學

全壹冊洋裝脊皮金文字入美本
正價金六拾錢
郵税金八錢

三島醫學士か我國に於ける學校衞生學に就て、如何なる學術と功績とを有せらるゝかは、江湖既に定論あり。本書は實に學士か公命を以て四方を巡回し、今日の學校と生徒とを調査したる刻苦丹精に出て、猶ほ前任文部大臣一伯一子の勸誘に成る。其議論の斬新正確にして我國學校の實際に適合すへき事は論を俟たす、醫師、教育官吏、教師及ひ校舎建築工師は、必す一讀すへき寶典なり

文部省普通學務局
學校衞生事項取調囑託醫學士三島通良先生著

救世 種痘學

全一冊洋裝
新版種痘手術圖解入

正價金二十五錢　郵税二錢

種痘の世に鴻益あるは何人も知るところなれども、其何れか眞正の種痘法なるやに至りては之を識る者稀なり。是蓋し年々天然痘の流行する所以なり。本書は最新の學理と數年の實驗とにより、先生の著述せられしものにして、議論嶄新、例證正確、種痘學に於ける近年の良書なり。醫師は勿論衞生に關係ある吏員及ひ學校教師は必す一讀すへきものなり。

賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

六角先生御方

若みどり香水効能書

定價
大瓶金五拾錢
中瓶金二拾五錢
小瓶金拾五錢

○此若みどり香水はよく頭のふけをさり髮のつやを出し毛おしを速くして毛をすなほならしむ

○此わかみどり香水は髮の薄きところにつければ日かずをへずしてよき毛を生ず

○此若みどり香水はよく毛髮の根を養ひて毛を丈夫にするもすなほにするがゆへにきれ。ぬける。となく又しらがとなると少し

○此わかみどり香水はにほひよくして髮のねばりを去り常にもちゆれぱあらひがみの如くにして逆上をさげ頭つうの憂なしその若緑となづくるは髮の毛のつやよくなり黒髮のみどりをなしてうるはしきと年老て若き人と異なる事なければなりもし今の世に浦島あらば玉手箱をひらきて猶悔るとならん世に多き品と同ふする事なかれ

○御婦人方は髮をほどきたるときはつむりの地へ筆或は手の掌にて塗擦倘ほ日々筆にてぬるべし男子は朝梳る時に當りて之をふりまきて塗擦すへし

發賣元　横濱市本町一丁目十三番地　明治屋

東京賣捌所　神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

博文館編輯局校訂　種彥傑作集　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　京傳傑作集　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　柳澤、越後、黒田、加賀、伊達騷動實記　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　三馬傑作集　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　眞書太閤記　全四冊　一冊五十錢　郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂　源平盛衰記　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　南總里見八犬傳　全三冊　一冊五十錢　郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂　東海、岐蘇、奧羽、江ノ島道中膝栗毛　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　爲永春水梅暦春告鳥　全一冊　正價五十錢　郵稅十六錢

博文館編輯局校訂　通俗三國志　全二冊　一冊五十錢　郵稅各十六錢

高橋太華山人著　太閤秀吉　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

高橋太華山人著　河村瑞賢　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

村井弦齋君著　紀文大盡　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

村井弦齋君著　近江聖人　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

幸田露伴君著　二宮尊德翁　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

原抱一庵主人著　大石良雄　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

幸田露伴君著　日蓮上人　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

遲塚麗水君著　菅相丞　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

渡部乙羽君著　上杉鷹山公　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

三宅青軒君著　賴山陽　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

従七位城井侮庵君講述
◎史記列傳講義　全三冊　一冊廿五錢　郵稅各八錢

小宮山綏介君講述
◎詩經講義　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
◎墨子文中子講義　合一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

従七位城井壽章君講述
◎荀子講義　全二冊　一冊廿五錢　郵稅一冊八錢

太田淳軒君講述
◎莊子講義　全二冊　一冊廿五錢　郵稅一冊八錢

慶應義塾大學部講師小宮山綏介君講述
◎韓非子講義　全二冊　一冊廿五錢　郵稅一冊八錢

慶應義塾大學部講師小宮山綏介君講述
◎老子列子孫子吳子講義　合一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
◎近思錄講義　附 近思別錄　合一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

平井晉堂君講述
◎戰國策講義　全二冊　一冊廿五錢　郵稅一冊八錢

正七位內藤耻叟君講述
◎靖獻遺言講義　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
◎大學中庸論語講義　合一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
◎孟子講義　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

正七位內藤耻叟君講述
◎小學孝經忠經講義　合一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

石川鴻齋君講述
◎十八史略講義　全二冊　一冊廿五錢　郵稅一冊八錢

石川鴻齋君講述
◎正文章軌範講義　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

石川鴻齋君講述
◎續文章軌範講義　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

太田淳軒君講述
◎唐詩撰三體詩講義　合一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

頼山陽先生肖像
論文
河村北溟先生講述
◎日本政記講義　全二冊　正價六十錢　郵稅八錢

西村豐先生編纂
◎文章詩歌作法良材　全一冊　正價四十錢　郵稅八錢

◎正文章軌範白文　全一冊　正價十五錢　郵稅四錢

女學雜誌 第十九卷 第三百六十一號
明治二十七年一月六日發兌

社説

年の始に一とせを懷ふべし

年の暮に春を懷ひたらんものは、今はた、年始に際して、一とせを懷ひ、春のはじめに冬の終りを覺悟すべし。

流れゆく月日は水の如し、之に斷絶あるべからず、消えて盡くる命數は落花に似たり、復たび木梢にかえすべからず、然りと雖ども、流は究まつてまた伸び、花は落ちて亦た咲くによりて、水に仕切りあり、花に再生ありとするもの多し。左れど見よ、月日に期限あらず、たゞ日に月に過ぎゆくのみ。花に、復活なし、つぎ〳〵に咲き出でて以て樹木を老するのみ。あゝ、年月のとなへは人爲のみ、光陰去つて亦却らず、ひと安くんぞ歳華を再たびすることを得ん、年始はこれ年暮、第一日は、これ第三十二日のみ。心せよ、同胞。新年は、即はち舊年の一段、老したるものにあらずや。

左れば、舊年の經驗は、以て新年に繼續せしむべし。奈何んぞ、年々に生れて、緑兒の無智を望みとすべけん。去歳一年の失敗を忘るゝは、これ失敗に葬らるゝ也、之に智識して本年の誡しめとするは、之を活用する也。請ふ、今より、本年の爲めに、意氣を壯んにせん。

○手をあけて待構へよ

前に準備するは爽快なれども、後より片付くるは、元氣の無きものなり。一時間の準備にて好きとも、後片付とすれば、半日はかゝり、而も心地よろしからず。仕事は、万事、手をあけて待構へ、來れば直ちに處辨するの氣構へにてあるを要す。仕事に追はるゝことなかれ、仕度して其到來するを迎へよ。此覺悟を第一着として、年頭、夫々の部門、部署に着目し、

之れは此れ、彼はあれと、先以て、豫算し、經綸し、一々仕切りを立てゝ、万事に整然たる紀律をつけ置くべきものなり。

○先づ尉官、下士官を命ぜよ

一家百二百の器具は、宛から軍兵の如し、之を一々部署し、其の立ち場〳〵に定居せしめて、イザ御用と云ふ時、即刻、召に應じ得る仕掛に整のへ置かざる可らず。而して、斯くあらんとの手はじめには、箱を造り、棚を架け、針をうち、袋を吊し、繩を用意するなど、さま〳〵の心得あるべし。凡そ此等の前用意は、尉官、下士官を定むるが如し、軍兵一々を部署し管督し引率する爲めには、緊要の事なりとす。先づ最初に、此等大部署の準備整ふにあらずんば、爾后、奔命につかれ、周旋にもだゆるとも、譬へば、塵の盡きざるが如く、落葉の拂ふ間なきが如く、あとより〳〵續々として面倒を生ぜんとす。故に、箱、棚、の類をつくるに費用を惜しむとなかれ。此等は、余計に似たる大切要のもの、無用に似たる最初最大の入用品なり。

○三百六十五人の一大隊を部署す

一年は、三百六十五日なり。三百六十五日は、猶ほ三百六十五人の兵卒の如し。之を引率して亂さず、之を使役して遊ばざらしめんとには、亦た部署なかる可らず。部署とは、軍を分つの謂なり。或ひは、十二軍に分ちて、月の名を附し、又は、五十二隊に分ちて、週の名を與ゆるなど、夫々最初の心構へなるべし。而して、此一軍には、彼の事を爲させ、彼の一隊には、此事を爲さしむるなど、總大將たる吾一人中心の指揮、先以て帷幄の内に定決する所ろなかる可らず。

○一日を好く送り亦好く迎ふ

一日、一日を好く送り、又、一日、一日を好く迎ふるには、日記なかる可らず。而して、一年中の日記帳は、年頭すでに手の内にあり、一月一日より嚴密に記入せざる可らず。扨て、日記帳には、色々の品あれども、最とも調寶にして十分に備はりたるは、印刷局製の當用日記なり、一冊三十五錢以下にて買ひ求むることを得、決して其費乏を惜しむなかれ、帳面

に錢を儉約するは、尤とも愚なり。此日記には、既にありし事を日々記するのみならず、后に起るべき事をも前方其當日の所に記し置きて紀念すべし。例せば、三月十日何方へ行くべき約束ありとすれば、先づ三月十日の一葉に於て、欄外に此旨を記し備忘となし置くべきが如し。

○僕婢の誕生日

一家に、一家の紀節あり。目出度き事は、誕生日、結婚日、家督相續日、仕官卒業立身の類尤とも祝すべき日なるべく、悲しき事には、命日の類なるべし。此等は、念の爲め、前に言ひたる日記帳の夫々の日にあてて兼て記入するか、又は一帋に認ためて張置くべし。而して、誕生日の祝ひには、吾家族のみならず、寄宿せしむる書生、同居人、及び召使ひの僕婢などの誕生日をも加ふべし。僕婢などは切めて此れ丈けの同情にても受けしめたし。一年たゞ一度の事にて、之を待ちかまへ、之を歡こび送るの情は大方ならず、彼等の身に取りては、天にも上りたる愉快となるものなり。

史傳

大哲學者、女性を崇拜す

佛蘭西近世の大學者アウガスト、コムトは、實驗哲學の主唱者にて、また近代社會學の創立者なり。天地と現社會との實况を調べ、之に形はれたる理法を考がへて、之に隨がひ社會の弊風を矯め直し、政治の仕組を改造せんとを欲し、深く究め細かに考へたる末、西暦一千八百三十年、其哲學の初卷を世に出せしが、爾來二十年を經、更に沈思精査してやうやく社會學本論を世に出すに先だち、俄然一婦人の誠愛にふれて非常の感化を蒙むり、其哲學に天の洗禮を受けたり。即はち、千八百五十一年出版せる其 System of Positive Polity. の序文中に云へらく

余れ第一段の著作を畢りてのち其の第二段にうつらんとするに當りては、永續すべき深き刺激を要すること切なりき。わが智力は、長年月の觀察にてつかれ、年わかきころ

世の景勢に慨してわれと新意見を組織したる如き英氣最早失せゆきたり。當時はまことに余が德性の復活更生するヿを切要としたりし也。然るに幸はひなるは、六年前類ひなき天の使、余が上に下り、進歩して美しく化したる高き人情を其まゝ余れに與へんとて來りたり。これ即はちクロチルダ夫人なり。余は、此夫人より、人間の最高の情を初めて與へられ、道德上に於て復活したり。之より以後、余が世上に公けにしたる意見格言などにて、苟くも世の歡迎賞贊を得たらんほどのものあらば、皆なこれ心中に此夫人を禮拜せしが爲めの感化によるなり。此の神聖なるクロチルダが余が心の上に働かせたる宗敎上の感化の如何に大なるかは、余が初段の著作の頃の言行と其後の言行とを比較する人の直ちに承認するヿを得る所ろなるべし。余がクロチルダに於ける愛情の切なるを見て、余が愛は只だ一方に偏したりと思ふ人もあるべし、左れど凡そ高美なる人情は皆互ひに結合せるものなるヿを知らんほどの人は、余が他に對するの愛情は之が爲めに減せず反つて何如に大ひに進歩したるかを極めて容易に承知せらるゝなるべし。余が十四年前に失なひたる高尚にして優しかりける余が母は、啻に情の上に於けるのみならず、余が實際の伎倆並に智德上の能力に於て、すべて大切なる品性を最初に與へ玉ひたる根源にてある也。然れども、余は今ま謙くだりて白狀すべし、余は實に母の價値と母の余を思ひての悲憂とが當然要求したる丈けの愛情を之に對して感ぜしヿなし、否な感ぜざりしのみならず、其感せし丈けの愛情をすら、近來の敎育が、余り見せぶりて愛を現はすヿの何如にも心ぐるしく、之に倣ふと思はれんヿの恥かしかりしなど、眞とは殊勝ならぬ思ひによつて、之を實地に現はすヿもせざりき。然るに、余が、クロチルダを禮拜せしより此の方、余が先の母に對する尊敬の念をも更めて引起し、余が毎週墓に詣づる折、又は日毎に祈りする折、クロチルダの面かげと、母の御姿とは、いよ／＼親しく相混じて、余が前に一つとなりぬ。左れば、此二大使が余に於ける敎訓は、余が多少の事業の世に紀念せらるゝと共に、幾久しく紀念せらるべし。尙ほ之れのみならず、勞働社會に屬する一賤女にして、余に勞

役の務をなしくれたる一少女は、余が爲めに働らくとのみ思ひて毫も其他の事を自から知らざるのうちに、道德上完全せる驚ろくべき雛形を余に示しつゝありき。彼女が信切に余に注意を爲しくれたることに於ひて、余に於ける前の二天使の感化を更らに復活せしめたり、もし故障なかりせば、余は此のソフヒエ、ブリテットを、余が養女となせしなり。

此の三つの美わしき女性によりて、余は三つの同情の天性を敎へられたり。即はち、同輩間の愛着、優者への尊敬、をよび、劣等者への信切。

コムトは、かくして女を崇拜し、女に祈禱すべしと論ずるの人となりぬ。

○大儒貝原篤信の夫人

後に貝原篤信とて、一世に名を掲げたる筑前の大儒貝原久兵衞は、初め福井の町つゞき荒津と云ふ所に生れしが、二十才ほど迄は、常に川狩を好み、何一つ辨まふるともなかりしが其夫人は生れかしこく且つ儒者の女にてありしにより、或日、夫久兵衞に向ひ申しけるは、人間には人間の道と云ふものありとこそ承われ、其許の如く夜ひる空しく打暮して人道を知らざるとは、人間の法にあるまじく候と諫めしに、夫之を聞きて、左候はゞ其の人間の道に入るとは何如なるとをするぞと問ふ。妻の云く、そは學問を以て至るとに候はんと。さらば夫を敎へよといひし時、妻始めて大學を取出で素讀なさしめたるに久兵衞忽まち感發し、斯て居るべきにあらずとて京都に登り、年を積み在京すると前後四十年、終に天下一世に名を掲げ、筑前の太守より三百石を賜わり、剩さへ、昔しの太宰府の學校、舊號學業院の名を許されて、學業院篤信と云ひける、(事跡合考による)。而して、今に至るまで、篤信の名を知るもの多くして、其夫人を知るもの稀れなり、夫人の内助はつねに斯の如く、而も内助の効のいと大ひなると亦斯の如し。一世の偉人にして、内に賢こき助けなきもの極めて少なし。

白きを見れば夜ぞふけにける　炭團

雜錄

宴會に臨みて婦人の爲に慷慨す　石翁

近頃ろ或る親睦會に參りあわせたるに、夫婦同伴を要むとの觸れありつる爲めか、特の外に婦人の來會多ほく例になき集まりとは見えたり。われ、かねてより念ふよう、宴會に其妻女を同伴するととならば、如何なる放蕩男子と雖ども、少しは容赦して謹愼なるべし、故に宴席より忌はしき妓女を遠ざけ、又は、只管ら飲むと醉ふと騷ぐとのみを遊與とする下卑たる習はせを改更するの妙法は、實に妻女同伴法の新習慣を行われしむるにありと。此日は、則はちわが思案の實際に効能ありや否やを試さんとて油斷なく有樣を睨み居たり。

不幸にして、意外なりき。男子は、遠慮なく飲み玉ふ、食ひ玉ふ、醉ふて大騷ぎに騷ぎ玉ふ、イヤ早や見苦しき迄に崩れ玉ふ倒れ玉ふ。而して、此御酒興の畢るまで、婦人方は、アキレたるが如く、困れるが如く、ひもじきが如く、物ほしきが如く、只だ折々に箸を下ろして、肴、菜、少々づゝをつひばみ、密かに以て御飯の到來すべき時刻を待ち玉ふ。

われ此躰を觀て、慷慨し、飲まぬ性とて同情に堪へず、大だわけに騷ぎ狂ふ馬鹿者等を見下げて長大息すらく、

嗚呼、汝等が飲める酒は、御婦人方が定めの如く出金したる會費の幾分を割きて頂戴するものなるぞよ。醉つてくだを卷くうちにも、有がたく頂戴せよ。

抑そも有髯男子が、婦人の會費を減づりて齊人の醉興に耽るとは、淺ましくも亦情けなき所行ならずや。

よつて、腹中左の四則を生ず、些さか以て婦人に對する義俠的代言を爲すなり。

一　酒を出す宴席に婦人の會するときは、婦人は酒を飲まぬものとして(固より飲みもすまじ、又、飲まぬが善し、婦人の醉態は一層の事なり)、特別の取扱かひを爲すべき事。

一　特別取扱法の第一は、ラム子入のサイホン一本宛を交ゆる事。

一　第二法は、食パンとジヤム少々、又は、サンドウヰ

ツチの類を添ゆる事。之は男子が酒を飲む間に飯を食するは氣の毒なりとて、格別の詮議に及びたる御主意なる事。

一　第三法は、好まぬ乍先以て會費を三分の二に減ずる事右條々を案ずと雖ども、必竟固息の策なり。妻女同伴法が、果して之れほど効なしとすれば、此上の一法は、食禮を改たむるにあり、即はち、西洋料理にては、たとひ酒を飲みても亂れざるの實例昭々たれば、日本料理にても、西洋料理と同樣、テーブル、椅子の構へにして、食禮を改たむべし、之れや此上の改良案なるらし。

講壇

女學生の勤儉につきての編者が演說筆記を載せんとし、

叩扉

湘煙中島女史の病を訪ふの記を載せんとし、

問答

孤兒院の事業につきての周密なる問に答へたるを載せんとし、

文藝

校友會と云ふものゝ組織に付ての一案を載せんとし、

女學

ハムレット曲事のオフエリアを論ずる一篇を載んとしたるが何れも餘白なきにつきて次の號にまはすとさなしぬ。

統計

◎昨年の女學

文部省第二十年報（明治二十五年分）によれば、

○高等女學校は、全國通計にて、

官公立、八校　私立十九校　合計　二十七校

教員　官公學にて男教員四十八人、女教員四十六人

私立校にて男教員九十一人、女教員百三十四人

生徒　官公學にて千三百四十三人、私立にて千四百六十人

卒業生　官公學にて二百十六人、私立にて二百七十四人

○幼稚園は、全國通計にて、

官公立、百二十八園。私立、四十九園

保姆、官公立にて二百六十六人。私立にて九十一人。

幼兒、官公立にて男子、五千三百十五人。女子四千五百十八人

私立にて、男子、千二百十六人。女子、九百六十三人。

○尋常師範學校、四十七ヶ所の內、女子部を置くもの廿七。

其教員中、女教員五十九人。

女生徒合計、八百八十九人。

女生卒業生、二百〇六人。

◎宣教師派女學校の經濟

昨年の米國傳道會社報告によれば、左の如し、

校名	校資	借財	米國傳道會社補助	外國教師人數	一年入費
神戸英和女學校			、九七六	四	五、〇二五円
女子傳道學校			、三〇〇	三	
神戸頌榮幼稚園				一	
同練習校			、五一八	二	一、一二九
松山女學校		九〇		二	
京都同志社女學校		、一九六	、四三〇	三	一、二〇九
京都看病婦學校			、七三四	三	七三四
梅華女學校				三	二、六四二
高梁順正女學校					五五五
岡山山陽女學校	、二〇〇円	、二〇〇		二	一、二五〇
新潟女學校		、三〇〇		二	、五〇〇
鳥取英和女學校				二	、二五七
熊本女學校	一、〇〇〇	、二三〇		二	、四〇〇
前橋共愛女學校		、〇六〇		二	、三九〇

逸事

○監督ウイリアムの寢室

監督ウイリアム一と月の生計數圓の費に過ぎず、月俸として受けたる數百圓の殘金は、悉く慈善の用に義捐せり。三一教會、三一會館など、皆な此の金にて造られ、其他人の知らぬ救濟に用ひられし額算す可らず、然るに、居常、立教大學校内の一室に假住ひし、室に古びたる寢台にかたき蓐を載せたるもの一臺、半ば破れたる鏡一つあり、他は推して知るべき也。嘗て一支那人あり、來り宿するに、先生、此寢台を讓りて、身はひそかに次室の板の間に臥したりき。

○新島襄青年敎育の氣慨

新島襄氏、再度の洋行にて米國より歸られし折、某、之を旅館に訪ひて談ぜしヿ數刻、先生日本敎育の事を語りて且つ言ふよう、方今の景勢斯の如くなるに、私供もし青年を立派に敎育するヿが出來ずば、生きて居る甲斐はありません、と。語了らず、淚、眼にあり。某が先生に動ごきたるは、此時を最初となすとぞ。

書架

○婦人のかゞ見

さきに「青年立志の礎」を著わしたる松村介石君、婦女子の爲にも亦此類の書なかる可らずとて、則はち今ま表題の著作あり。女子の敎育より、美人論に至るまで、二百二頁の中冊子に、幾多の有益なる訓戒を示せり。松村君が著書に、二つの特色あり、一は、氣力精神あるヿ。二は、實踐躬感の裏より發するヿこれ也。此書、其性質よりして、初の方には、左して變わりたるヿなけれど、言々一々實際に發し、忠告敎訓の信切なるに至りては、他に多く類を見ず。年少女子に取りては、此上なき益友となるものなり。

○旅路の感

編者が深く敬重する老夫人加藤とし子女史が米國漫遊の所感を記したるものとす。其信仰、其熱意、其潔白なる奉公の念、ともに此の小冊子の短文中にも見われたり。

浪六漫筆を讀む

無名氏投

ちぬの浦浪六子の物されたる、浪六漫筆といふ者出ぬ、晩まきながら手に取りて讀めば、こは皆斷編小品の集なれど、さすが著者が平素の主觀も明かにて、いともいともめでたきふしも少なからず、表紙の好み口繪の物ずき凡ならず、或る人此の雷公雲に躍るを見て、かゝるきはをこそグレートとは申すらめと云ひたりとかや、そはともあれ、集中面影のすねたる石川五右衞門の凄絶なるは敢て云はず、評者が眼に寫りしは音曲天女の編の哀なりけり、翠帳紅閨の内に生ひ立ちてからき浮世の汐風遠きあたりにも、かゝる悲慘はいで來るかと思ふもかなし、瑩よる澤田伯爵の後園にピンとすねたる白梅一枝の風情なつかしく、堪能の琴の音には梁上の燕飛び、水中の魚も躍なむばかりとかや云ふ姫君芳子がなり行き哀れとも哀れなるかぎりなり、初戀に命もと思へど明て得云はぬ、内氣の處女心に、戀人の死は如何に悲しかりけむ、ましてや其の枕邊には姫が心をこめし贈り物の、靴足袋一足、白紙に包みしまゝに、殘りしとか、歸らぬ人に叩くすべなければ、戀なりしか、只恩義にむくゆる心なりしか、それと定かには知るよしなけれど、そもや此事姫が胸には如何なる影をや宿しけむ、瀨川正枝が心なく染めし筆の跡は、今もなほ此の哀の姫が手函の中の深草の團扇に殘るとかや、あはれ〳〵、高樓月清き夜、何とやらむ悲しく物さびて冴ゆる和琴の爪音は、此の優しの姫君が心をこめし手づかひに亡き戀人を弔ふなりとぞ、讀むでこゝに至り、誰れか其の哀に泣かざらめやは、まことに去にし人の跡追ふて共に世を去るきわは、悲からぬにはあらねど、音にも得立てゞ身を焦す、得云はぬ戀にやつるゝ身の哀を、思ひし人は知るや知らずや、早世を更へて昔もなし、下々のはしたなききはとは違ひ、さすがに我とわが身を淵川に沈むるもならず、生きて甲斐なき命ながらへ、涙に瘠る目を送り、思に沈む夜を迎ふ人の心を何れぞや。あゝ此の間無限の悲慘こもらずや、月は澄めど花は匂へど、物の數かは、此の人間てふ小天地の內にひそむ運命ばかり悲きはあらず、思ふ此の色音幽けき月前の琴の調には、彼の哀れ知らぬとぞ云ふ鬼神も面そむけやせむ、評者はこれ文界の門外

漢、アートとは如何なるもの、美とは如何なるものと定かに知らねば、此集中何れが最も傑作なるやを知らねど、我は此の編に哀を寄する事いと深きぞかし。讀むで「去年の暮より澤田の令嬢芳子は、月に一たび高樓に入りて夜更るまで和琴を奏せらるゝ例となりしが、色音幽に掻きならす其の手遣ひの、何となく哀れに悲しふ物さびて、誰か知る此の日は彼の正枝が命日にて竊かに其靈を弔ふなりとぞ」に至りては、われ知らず、文字の綾も朧になりぬ。

溝口與之とは、涙六子未定稿の百婦傳中の一なりとか、織田信方の家臣溝口七太夫の娘夫七郎が主君の夫人と通じ、陰謀の密策を謀するを知り茶室に其の夫を誘ひて此を刄し、以て公に奉じ、男兒の死を請ふて以て正義に殉ず、其の死に臨むや凛乎として其威儀を調へ其胸間の寂たるは光風霽月の如く老父を撿死とし、親戚を請ふて最後の座にあらしめ從容明鏡に花顏を寫して、泰然自若として屠腹するの事を記す、實にや、軟弱の匹婦も其の心の動くところ、義理の柵、戀の羈にからまれては、死して顧みざること多き世に、此の熱意の腸を抱ひて、忠信孝義の制きびしき武夫の家庭に生れ出しは此の與之にして、此の性情の花柳の街に顯はれしは巢林子曲中の小春の如きものならむ、等しく此れ燃ゆるが如き、情熱に動かしがたき意志を兼ぬる女丈夫、彼の夫を思ふ情熱と君に奉ずる公義心と相戰ふ胸の内、彼の薄烟のみ登る火山の内部には山を飛ばし陸を顚へす水火の勢あるが如く人間の胸中亦多くの暴風あるを見る、たとへ君の爲とは云へ、花にも劣らぬ美貌の婦人の優しき腕に、いかに忍べばとて、夫をさせし心は恐しけれど、三年の前に友白髮をちぎりし新枕の跡に身を形見の白小袖に包みて、見事の最期はやさしからずや、彼の網島に哀れを止めし人は巢林子の筆によりて、不朽に傳へらるべけれど、此の忠烈の女丈夫溝口與之は、人にも知られで過ぎなんとす「戀の闇路を走る女は世に耽れながら、古今の烈婦溝口與之が名は空しく消へて人知らず、いづこの里にも不義の情を重ねし比翼の塚はあれど、血涙を呑むで良人を殺せし溝口與之か孤墳の影なし」と慨ふる涙六子に我深く同情を表す、かゝる事を記するは此の著者の獨特なればや、滿編涙六子の氣魄躍然たるを見る、次に磯邊の浮世中々に妙なり、深く心をひそめて讀めば人世の影の宿る心地す、一夕談

の内、餘裕のくだりに大石良雄、木戸松菊、賴三樹等の風流を哀がり彼の偏狹の儒輩には語じ、凡俗の遊士には云はじと云ふ人の心や床し、友誼は其角一蝶が友情を擧ぐ松の青葉をほし魚の腹にはさみて、世にあるを知らせむと約する畫工が心ぞ哀れに、花街に魚を得て狂喜する俳師が情や切なり、げにや此二人がアートの社界に覇たるも亦偶然にあらず、友の情けの篤きばかり、嬉しきはなきに、今の人の心は薄きこと吉野紙の如し、我其角一蝶が友情に感ずる事深し、貝原先生が愛妓小紫に於ける情致も哀れに三代目高尾が逢見ぬ友に盃を寄する風雅や掬すべく、歌川春章が滑稽や絶倒するばかり可笑しけれ、其他雪月花、遊女、乞食、春曉夢、涙六茶屋等あり、何れも涙六子の想明かに躍るを見る可し、此の編多くは事實を記する如し、左れどアートとしても評す可きあらばそは他に評者のあるあり、我は只我主觀の糸にすがりて覺束なくも我感を云ふのみ。

家政

小兒の遊戲

けい子

一歳の事の始めとて、門には松飾りの色替へぬ緑をとゞめ、奥には梅の花のなつかしき香を籠む、千門萬戸待得たる春の賑び、老たるだに寄行く年波の數を忘れて、新玉の壽千代八千代と祝へば、况して幼なきは、我にもあらず、追羽子紙鳶に狂ひ給ふも道理なりかし。

凡小兒は遊戲を好むものなり。母の懷に襁褓に包まるゝ程の事は言はず、言葉遣ひも未だ廻らぬ勝の頃より、早さま〴〵の遊びに餘念なげなる、是や小兒の天性なるべし。造化の翁の至らぬ限もなき、浮世の旅のなか〳〵に險しくはしたなきを見て、浮とは其門出をせさせまじとの用心にやあるべし。總て小兒の遊びを見るに、皆險しき旅の練習ならぬはなき、身躰筋骨の發育は言はずもあれ、智德の涵養、五官の修練概ね皆之に由らぬはあらじ。彼小兒が樂し氣に遊び戲むれて、

夕陽の何時しか沈み果てしだも知らぬ間に、巨多の經驗、巨多の習練の其中に得らるゝを思へば、造化の妙用誠に至れるかな。然るを世には遊戯は徒らに惡習を增し、私意を長ぜしむるものなりとて、一概に是を押遣りたまふ、親もありとや、思はざるの甚だしきとにぞある。殊に彼小兒を重んじたまふの餘、遊戯を危ふしとて差留めたまふが如きは、過ぎたるは及ばざるの喩、小兒の心性を不活潑にし、小兒の身躰を虛弱にしたまふと同じ。危ふさは抑も何れぞや。其に續て可笑しきは、彼衣裝の汚れを恐れたまふ親ぞかし、衣裳と小兒と何れか重く何れか輕き、是は言はずものとながら、折板の初春遣羽子に祐禪の袂汚したまふもあるべければ、叱られたまはぬ先きにこそ、母人に此主意を告まゐらせ置んとにこそ。春の遊びは春らしく、霞に蝶に實に好き取合せにぞある。其數々の多き中にも、遣羽子、手毬、歌留多、双子六、紙鳶揚、獨樂廻し、竹馬などは、其重なるにやあるべし。

○遣羽子

松飾ゆかしき門に、振りの袂の麗はしく、遣羽子の姿、如何に優美にも高尚からむ。我國の女子は概して前屈の癖あり、前屈の脊髓を屈し、肺量を減じ、衞生上甚だ有害なるは、玆に言ふも管なり。然るに此遣羽子は、不知不識體を後ろに反らし、天空に向ひて直立するものゆゑ、只其れ丈にても、我女子の爲めには、善き遊びなるに、之に連れて體を動かし、四肢を動かし、全身一として運動を取らざる所なし。新年の賀膳、衞生上より言へば、隨分打そむかるゝものも多きに、又此得難き運動ありてこそ、其害も少なけれ。彼西洋にては戸外遊戯としてクロッケーなるもの行はる、去れど我遣羽子に比しては一歩を讓るなるべし。古書に云ふ、羽子は蜻蛉の形に似せて造りたるもの、蜻蛉は蚊を食ふものゆゑ、之を突けば夏日蚊に食はれぬまじなゐとなると、蓋し蚊は人の血を食ふ有害のものゆゑ、害を除くといふ意にて、年中の息災を祈るにや。羽子を追ふ兒、其形羽子に似たり。人身の病を拂ふもの、運動に如くものあるべしやは。

○手毬

手毬も亦羽子に次ぎて多く行はる、羽子は室外ならでは行ひがたきも、手毬は室の內外を問はず何れにても行ふべし。遣羽子の動作活潑なるに比すれば、一層上品にして愛らしく、

深窓の女子の弄びには、之に上越すものもなし。只口惜しきは其運動の手腕にのみ偏して、全身に及ばざるとを。

○加留多

加留多は、歌加留多、源氏合などなり、共に優美にして好し。殊に前の二つと違ひ、幾分か文學上の趣味をも解するを得べく、又爲めに機敏の性質を養ふを得べし。負けじ取られじとての爭ひ、果は取合ひ引搔などするは、罪なしといへば罪なきことながら、結立の髮をこはし、おろし立の衣裳をそこなふ、少しく殺風景の恨みなきにあらず、去れば是は程よくするが好かるべく、運動としては是も亦其一なり。

○双子六、むさしの類

双子六は智育上の好き戯れなり。其趣向に依りては、浮世の樣も大方は是にて得知らるべし、源氏双子六などは、是亦幾分か文學上の趣きを加へしものにて、其外に只世間の階級を示せしに過ぎざれど、彼原因結果を推して作れるものなどは、知らず識らずの間に、行く〳〵我心得べきふし〳〵を悟り得るの効なきに非ず、未だ幼きが嬉し氣に睦み寄りての遊樂、之に過ぐるものあらじ。むさしも亦智育上の遊びにて、双子六ほどの巧妙なきも、福壽草咲出る座敷には、是非又加はるべき遊びにこそ。

○紙鳶揚

空うら〳〵と打霞めるに、紙鳶を中空に飛ばす、兒童の樂しみ如何にぞや。是は總て男子の遊戲とて、頗る活潑に、頗る爽快なり、殊に屋外の然かも曠濶なる所を選ぶものなれば、新鮮の空氣を呼吸し、之と同時に、兩手を始めとし、身體の諸機關概ね皆適宜の運動を爲す、糸次第に延びて、紙鳶の形漸く細くなると共に、兒童の精神も亦半中空に誘はれ去る、其間得る所の身體の發育、素より少小に非ず。且此遊戲は眼を遠きに用ゆるものなれば、近眼者の多き今日には、亦自ら之を矯むるの一媒介ともならんか、我國にて紙鳶の最も盛んに行はるゝは、長崎に如くはなし。春の日影の長閑なるに、老幼打混りて紙鳶を飛ばし、相戰はしめて贏輸を爭ふ、去れば紙鳶も亦頗る發達して、其形菱形を爲し、抑揚上下極めて自在なるが如し。要するに此遊戲は、殊に男子に適當にして、危險少なく、利益多きものゝ一なりとす。

○獨樂廻し

獨樂に數種あり、木獨樂、金胴、どん〳〵獨樂、貝殼獨樂等なり、何れも物理學を應用したる遊戯にして、亦是春の一景物なり、木獨樂、貝殼獨樂は室內にても用ゐ得べく、小兒の遊びとしては頗る恰好のものなれど、金胴、どん〳〵獨樂などは室外にあらざれば用ゐがたく、殊に金屬を用ゐあるにより、甚だ危險なり、前の紙鳶に比すれば、及ばざると遠きものなり。

○竹馬

竹の先に、木もて馬頭の形を作れるを着け、其尾に車を着く、眞に是小兒の戯れ、男は早くより馬にも乘るものとの心を養はんとにや、利害は言ふまでもなし。

以上の內に就て、假りに兩鬬を定むれば、女子の遣羽子、男子の紙鳶揚こそ、一は優にやさしく、一は爽快活潑にして、共に相對し相降らざるものなれ。必竟遊戯は小兒が世に出でんとての用意なり、修練なり、兒戯に均しなどいふ言葉、昔よりして用ゐらるゝを思へば、小兒の遊戯は、久しく世人が注意の外に置れしと知るべし、遊戯は誠に大切なり、努々度外にばし置きたまふと勿れ。

論說

女子敎育と武道

星野愼之輔

第三　女子の精神的修養に付て。

精神的修養には種々の法方あるべしと雖ども、實驗的と理想的との二つに分てば不可なかるべし、倘ほ行ひと信仰といふが如きか、觀法と識法といふが如きか、鍛錬と學問といふが如きか、然れば武術は實驗的の方に屬すべきなり、此二つの修養相待て始めて完成なるを得べし、人の心理を智情意の三つに分ちて言えば、智は見聞の學問に由て養ふべく、情は宗敎と美文學を以て養ふべく、而して意は實際の經驗に由りて養ふべし、武道は即ち此意志を敎育するものともいふを得べし。

今日の世は智者多くして人物乏しといふ者あり、總て學術は愕くべき進步を爲して卑劣心日に多しと嘆ずる者あり、之れ智に傾きて他を放置せしの誤ちにあらずや、日本は感情に輕動するの國なりといひ、輕跳淺弱の士女氣風に傾きしといふ

ものは、之れ意志の教育を等閑にしたるの現象にあらずや、男子教育は明治初年以來一蹶一起して漸く多くの經驗を經て今日の有樣にまで進み來りたり、凡そ何れの國も男子が進みゆく足跡を逐ひゆくは女子にあらずや、男子が失敗せる經驗を見て大に警醒せずんば非ざるなり、教育に於ても大に男子の跡に鑑みざるべからざるものあり、さらでも輕跳に流れ皮相に溺れ一時は殆んど見るに忍びざるはしたなさを現はしたるは女子教育の失敗なりしにあらずや、情感に傾く女流をして如何に誤たしめんかを懼るゝなり、總て女流の長所は情感に富める所にありて又失點もこゝにあり、此情感いよ〳〵發達せしむべし、而して智力と意志とをこれが爲めに薄弱ならしむると勿れ、きのふは東にけふは西に、げに浮き草の果敢なき人となることなく、沈思默禱に一念を凝し主觀的の修養をも爲さゝるべからず此一材料として吾人は、武道教育を勸むるに憚らざるなり、然らざればいつまでも客觀的注入的に依賴して摸倣的崇拜的の教育に終らんとす、萬事萬想皆一心より成らざるはなし、一心明らかにして始めて神を見るを得べく、又神を信じ得て一心漸く明らかにも成るものなり、理想的に神を信ずるとは我れも亦能くすれども神を觀ることは誠に修道琢磨の功を要すべし、女流の秀才願くは省慮する所ありて可なり。

第四　武道教授の注意に付て。

前述の精神なれば吾人等の最も注意すべきは教授の如何にあり躰育の目的に安んずる教授者なれば弊害や少くなかるべきが、若し爭鬪腕力の目的と心得たる武術家に教授を托するは最も危し、人は到底或意味に於ける偶像的崇拜信者なり、目に視耳に聽く物に執着し易きものなり、無形の思想界に入る者は先づ有形の手段より導かざるべからず、注入的より開發的に進むべく儀式的より精神的に入らしむべし、初めは形を組立てんことを教へ後には其形を破壞せんことを教ゆるなり、故に初心の者には敵を置きて爭へ〳〵と教え武器の使用法を教へて勇猛なれ〳〵と教ゆ、藝は競爭せしむるを以て研磨の好手段とし道は勇猛ならずんば修し難し、然れども一たび喚起したる爭氣は心中に潛伏せる爭心と我意とを盡く吐出せしめしなり、一たび奬勵したる勇猛の血氣は心中の怯弱

を滅して暴騷の氣を鬱結せしめざらんが爲めなり、されば此方法を執る流義も初心の者のみに止むれば頗る可なり、然れども初めより精神を說きて理を敎え、爭氣を退けて沈靜を敎ゆるの流義も亦大に可なり、唯要すべきは可成機械的にせずして放任的にすべく、可成强壓の手段を取らず激勵の手段を取るべし、是れ其主意とする所は心の修行なればなり、されば道場は嚴肅莊重にして苟も心を散漫せしむることなく陶然として心を寛ふし一點の邪念を置かざるを心掛くべし、心の開發は求むる時にあらずんば能はず自得は自己熱意の工夫に因らずんば能はざるものなり、されば師としては己れの技術と智力とに從はしめんと思ふことなく唯斯道の媒介者と成りて心を以て心に傳ふることを專念するの他なし、弟子としては我意を倒して師を敬し道を求むるに餘念なきやう勤むるを最もとす、師の意を背く者は道を傳ふるを得ず、弟子の心を吾心として愛育せざるものは道を傳ふるに寸功なきの師たるべし、古來武道に於ける師弟の親密にして互に愛敬する親子の如きものは實に是れを以てなり、今日師弟の氣風壞亂して輕薄見るに堪えざるものは道を修するの念なければなり、誠に痛嘆の至りにあらずや、斯くの如くしては能く文字を學び技術を知ることを得べし、然れども敎育の効果は何を以て安んずるを得べきや、思ふて爰に至れば胸迫りて又言ふにしも堪えざるなり。

吾人は最後に於て女子に武道を敎授したる今日までの實功を擧動の上に現はるゝもの丈けを擧げて見るべし、先づ著しきは輕佻と浮躁の者はいづれも沈着と成り、殺伐なる者は穩かとなり、しだらなき者は締りよき者となり、逡巡蹉跎の氣象は決斷を快活の上に現はすに至り、ビク〳〵せし者は泰然たる風采を呈するに至れり、此等は誰れも見て分り得べきものなれば爰に述べて證とす、畢竟するに一心定まり來りたる結果のみ、然れども未だ此等の現象をだに現はさゞる中修行續かずして挫屈する者亦多かりし、蓋し修道の徒に止むを得ざるの弊にして良藥は多數を結ばざるの故にやあらん。

多々辨じ縷々述るも到底滿足するまで述べ難きを知るを以て多岐に亘るを懼れて爰に辨を停む。

つれ〴〵草

門づけ

笠雪

落葉にそよぐ風の音も哀れに、冬の日足の少し傾きては、何とやらむ冷渡る、都とは名のみの片ほとりは、道行く人もたへ〴〵にて心自から沈み行くわが門邊に世を哀はれとや歌ふらむ當つる撥の手も拙からで細き喉に一しほのさびも妙に聞ゆる唱歌の一ふし、

　枯ほそる冬ののはらの虫の聲、誰に焦れてなくぢややら、ふくろに寒きひとりねや、君は心を置くしもの、

　觧けぬ一夜がうらめしい。

奏づる糸の音占、静かなる空にさへてわが腸に響く、あはれ如何なる人のすさびぞと窓を開けば編笠に面を包めどさすがに床しき乙女一人此の寒空に膚も薄きやれ衣身に纏ひて撥持つ手もたゆげなり、見るにはや涙さしぐみて袂なる僅の鳥目さぐりて之れ參せむと云へば、うれしげに受け取りておし頂く手も瘠せ細りていたく色あせぬ、しとやかに腰打かゞめて、會釋しつ歩み行く後つき、いと〻影うすく物悲しきばかりの姿なり、あゝ年の瀬に行く水の流や、如何なる人のなれる果ぞ、まだうら若き少女の世を捨てしか世に捨てられしか、破れし三味に浮世を叩くは、こがるゝ人のつれなくて、冬野にかゝる蟲の音を喞つか、あるは、投げてかゝりし、戀の破れつも浮世を捨てし山かづら、花も止めず雪も拂ひし元の袖一重に、世を隔てたも、氷る霜夜の枕邊に、昔の夢をやたどるなるか、思ひ出づ、今朝のほど都大路に、二たびまでも見し、二八ばかりの乙女子の、花の巷、柳の町に育ちし風情、色よき衣を裝ひて髪の形も美しけれど、打沈む面の色に物憂きさま見へて、冴へぬ眼元に露ありしは、何とやらむ、今もなほ心に殘る花のかげ、かどづけの娘のさきの日は、さるきはにやありけむか、さに非らで幸なき家に生れ來てなかなき藝をたよりにて親なるもの〻爲めにとて僅かなる畑の代に其日を送る者なるか、さもあらば打見には二拾に足らぬ娘子の世に

ある人の美しき、きぬの色目ふりもよき髮の形の眼につきて、其身のなりを省りみて消なむばかり恥づることもや、ありもせむ、物ごしも陋しく見へぬ娘一人、針目のきぬは包せて、ものごひさする親の氣はいかなるつらさなるらむ、思ひやるだに涙なり、されど世は只何事も、命運といふものの手に抱かれて、其の界に置るゝものなれば、落ち果し年のくれも、此の少女が罪にも非じ、親なる人の過にも非ざらむ、世に詫びてたつきの爲めと、かなづる人は憂ひにも慣れて心なけれど、哀れの涙のおのづから調にうつりて、都の町々の心ある宿に、袖しぼらせしも幾度ぞや、身はしづの唄ひ女なれど天賴三すぢの糸に宿りては、憂には泣ぬ、ますらをの腸を斷つ宵もありなむ、浮世の風に肌ひゆる冬の夕はつれなけれど、憂に詫るは、おん身のみか、一本の筆に心を打こめて世は秋とかこつ、詩人と云ふものあり、水の上に數かくとや云けむはかなき命にすがりて、得とげぬ戀に泣もあり、花の散り行にも泣き、月の澄にも泣き、國の破るゝになき、くさ木の青みたるに泣く、或は常闇の盲目に破屋のたつきをなげき、或は知死期の病蓐に渴きをいやす一盃の酒なきを悲しむ、或は秋の夜の露に打れて人世の哀知り初め幽澤の陰に落魄して薄倖の生涯をかこつ、あゝ彼等は浮世を叩ひて、此の哀れてふ者をさぐり無心に天地の妙致を歌ふかげに、世のいと妙なる歌はいともいとも、悲しききはを歌ひしものと云けむ人の上も悲かりけり、かくて、其がなかのすぐれし人は、後の世にゆかりの色を知るらむ人をこそ待ちもせめ、いとうちさがりて、そがざえも薄く生まれ來たりしきわは、世を終るまで陋巷の生涯を喞ちて後ちの世にも聞へず消へて行く數も多きぞかし、心ある人々はさすがに、歌人の上ばかり哀なるはなしと、一粟のなさけの露に、同情を寄するもあれど、世の利欲にさときともがらは、こを有らずもがなのすさびとや云ふらむ、げにや連城の玉も万卷の書も時ありて一碗の飯に劣るとわり、落ちて流るゝ歌人の命運は悲しけれど、世は錙銖の玉のみに乘らねばや、憂にやつるゝ人のみ必らず、要なきゑせ者には非らじ、目に見へて人を導く者のみ尊しとは定めがたし、たへなる神の配劑や世の裏にひそむ玄理なからずやは、此の世の事業に價ひなき詩人もとこしへのはかりには高きものとなりやすらむ、かゞやけるものとなりやすらむ、さら

でも唄ふ人は露斗りの私もなく偽もなく花に宿る鳥の如く、草葉にうたふ虫のごとく只天の氣にさそはれて、心かぎり歌ふなり、彼のすぐれ人と云ひ、ますらをと云ふきはも、神の置かせ給ひけむ、をきての儘に動きつゝ、短き世をば消へて行くなり、果敢なきは只わが詩人の上のみかは、よし、かくて、哀れ知らぬ人は何とも云へ、彼は世になす可の心とはなしぬ、かれが誠なる心の求むる所をしとげぬ、かく彼は人たるの道をば盡したるぞかし。少女よ、少女よ、おん身も亦一人の歌人ぞや、よし此儘に朽つるとも人たる上に何の欠くる所やある、持てる撥の折るゝ迄三味の明の碎くるまで打てや浮世の哀のかぎりを、歌へ、露けき悲戀の曲を、よし吹く風の烈しくて花の姿は散るとても、よしふる雪の重りつゝ柳の條は折るゝとも、厭はじな、捨てし身は、消へはせじ美にすがる身は、幸なくば雪と共に消へ風と共に散り行く末もをかしからずや、少女よ、今一度、此なた向けと窻にすがりて、のび上れど、はや遠く去つて影見へず微かに通よふ糸の音ほそし。

理學

遊星の空話　　けい子

春は柔らかに賑かならんぞ善きと、遊星の空話なる一篇を物しぬ。大陽系統の遊星は、言ふまでもなく、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八とす、爰には星の字を省きて、其頭字のみを用ゆ、故に水とあるは水星、木とあるは木星、地とあるは地球の如く心得たまふべし。

地「ア、草臥れた、いくら何でも、年が年中廻り詰めの休みッこなしとは恐れる、其れも日本人などが善く遣る、去年は箱根、今年は伊香保と言ふ樣な、保養旅行ならいゝけれど、去年の今日此處を出發してから、丁度三百六十五轉び、草臥れたも無理ぢやァない、而して又面白くもない同じ道行と父の太陽より與へらるゝ閃々たる光線を半面に浴びて、獨りで愚痴を溢して居る所へ、來掛りたる木星

木「イョウ大分お久しぶ

りで、大層おやつーですチエ。地「誰れかと思やア木星さん、お目出度うございます、今日は私が一ト通り旅を濟したので、人間といふ動物のかしらが、元日だの候のと、一月も前から大騒ぎをして、疊替の煤拂のと、ヤット是程に飾立てた、其處で私も一寸世間にも出られるといふものさ。木「道理こそ、成程能くは見えないが、簪か髪飾見たやうに、赤いものがちらめくのは、其りやア國旗とか言ふものですな………ウムヽヽ其外にも、門松とか注細飾りとか、其れは誠に結構です、其れでこそ、長々の旅行もしばへがあるといふもの、私何ぞは身體許り大きくても、石炭や琥珀見たやうに、身體が柔らかで、加之に四千三百三十二回も轉ばなければ、一旅行が濟まないから、貴公のやうに度々祝ひもされず、誠につまらないものさ。地「其れは大違ひ、貴公程目出度い方はない、私共の方では、中にも支那といふ國の者共が、大層貴公を大切にして、丁度今日さ、正月元日の或時刻に、貴公のお出なさる方を調べて、其方を開きといたし、何事も其方から始めれば、大層仕合がいゝとか何とか申して居りますヨ、だから旅をするも、嫁を貰ふも、引越しをするも、皆な其方からするんです、今日のお屠蘇も貴公の方へ向ひて呑んだんですヨ、其位有難く思つて居るんですから、些お奢りなさいましな。木「是りやア何うも恐れ入つた、何かお禮をせにやアなりますまいが、私の所は、お隣がツイ毀れて獨ぽつちになり、火星さんは大層離れて居りますんで、所謂酒屋へ三里、豆腐屋へ二里とやら、何も呈るものもございませんト氣の毒さうに云ふ、折柄小男ながら、其質堅く、運動もなか〳〵活潑らしく、すばしこきが、遙か彼方より聲を掛け「地球さんは先刻大層愚痴をお溢しのやうでしたが、貴公はまだ〳〵結構です、私なんぞは、始終親父の側に付切りで、八十八日目に、然かもなまけるとも出來ず、大急ぎで旅行をすますもんですから、些も面白いとはありません、其れに親父が近いのと急ぐのとで、熱くツて汗がながれます、斯ういふ中も氣がいれる、ドレお先へ參じませうト急ぎ行くは水星なり、此男なか〳〵に親父（太陽）の秘藏息子と見えたり。時しも遙かの大空より、ゆらり〳〵と歩み寄りし兩人のもの「お寒うございますト」ト同時に聲を掛られて、誰かと振向けば、是なん惡まれもの丶天王星、海王星なり、將門もどきに、善からぬ企みを起し、自ら天王

を名乘りし故の名にもあるまじく、又筏に乘りて海に浮び、馴れぬ櫓櫂取はづして水に陷り、儘よ浮世の捨鉢に、海龍王と現ぜしにもあるまじけれど、此二人兎角親父に遠ざけられ、日影にこそは置かね、親の餘光の温み薄く、人間ならば、紙衣姿に冬の日を凌ぎかねて、自づと寒しといふが、口癖にやなりけんかし、地「左様さ、鼻の先(山などのとか)見たやうな高いところは、寒くないではないけれど、私は其れ程には思はない、お二人お連立ちで、大層呑氣らしいね、天「呑氣どころか、長々の旅行に落膽して、足も腰も立ちかねる、其れに親父は、お前方程に搆つて呉れず、遠い道程を日々斯うして轉げた所で、チエ海王、詰らないといふのは、己等二人の事だらうヨ。海「さうとも〳〵、己等の道程は、地球でいやァ、六万百二十六日、威張て見りやァ、地球なんぞが、何ぼ美しい姿をしても、猫のお正月見たやうなものさ、だが本人の身に取つちやァ、餘り結構でもない、時に地球さん、お前にも一ツ恨みがあるヨ、斯うして同じ太陽を受けて見りやァ、お互は兄弟も同様さ、其れに兄貴甲斐もない、お前は己等を七曜の中にも入れて呉れずさチエトいふを引取り天「七曜の中に入れぬは未だしも、久しい間己等が居るとも知らず、見向きもせず、思やァホントに、淺間しいものだ。地「其分は眞平御免だ、脊に腹は交へられない、日月火水木金土の外にお前達を入れりやァ、九曜になる、今でさへ役人や會社の番頭なんぞは、日曜の日を待兼るに、此外に、天曜日、海曜日なんといふものを入れて、九曜にすると、私は何の位恨まれるか知れやァしない。話未だ終らぬに、白光麗はしく、鮮やかに練出したる金星、「是れは皆さんお揃ひト。辭儀殊の外恭し。地「御挨拶を致さうと思つても、餘りお名前が多いので、何の名をお呼び申して宜しいやら、金星様に、宵の明星様、明の明星様、大白星様。金「イヤモウ名前許りで、其程の德もなく、誠にお恥かしい次第で。地「何ういたして、貴公を支那の太白の母と申すが夢に見て、太白といふ賢人を産みましたと、實に德光御圓滿、其上朝夕の御出現、御威容の備はつて、鮮やかなところ、なか〳〵他に並びもございますまい。金「なか〳〵以て思ひも寄らぬと、其夢など申すは、大方支那人の虚誕でがなござらう

寄書

○女學雜誌に寄す

左の一篇、過當のほめ辭は多くありて、編者は額に汗するの思ひすれど、知己信切の情は、感謝するに餘りありとて、則はち年頭の本帋に收め、自からなぐさめ、又、自からはげますと云ふ。

唐突蕪辭を呈して敢て高明を瀆す願くば足下寛仁の大度を垂れて予が亡狀を咎むることなく幸に予をして予が衷情を足下の前に開陳するの榮を得せしめよ

予は素と僻陬の一靑年不幸にして茅屋の寒床に產まれ世の靑春と共に文明の學問に浴すると能はず困頓落魄幾度か世路の崎嶇に泣き漂流浮沈幾度か人情の波に卷かれ暗淚と痛恨とを以て殆んど人生の半を消失したる尤も可憐なる不幸兒にてあるなり今を去ると三年前聊か思ふ所ありて斷然笈を負ふて東都に上り螢雪に苦吟すると二閲年遠く山河を越へて住み馴れし父母の國を出で身は天外の孤客より輕薄なる他郷の人情に觸れて幾度か故國の恩愛に泣き胸中萬卷の歷史語るに友なく訴ふるに人なく徒らに思を春花秋月に寄せ花の都に在て轉た孤囚の辛酸を嘗めたり然れども予は尙ほシナイ山下に於けるイズライリの旅客の如く專ら身を上帝の指導に任せつゝ非常なる堅忍を以て萬難蝟集の中に立ちたり此時に於て愛なる神は此憐れなる旅客の爲めに偶然マナを降し玉へりマナとは何ぞ古びたる數冊の女學雜誌是也予は實に此時始めて足下の熱腸に接するを得て恰も炎熱足を燒く沙漠の中に活泉を見出したるの心地せり予元來奇癖を有す滯京二年の中都下幾十の會堂を歷問し所謂當世名士なるものゝ演說々敎を拜聽すると其幾十なるを知らず又其文章を讀味すると決して二三に止まらざるなり然れども未だ足下の文章の如く言々句々燃ゆるが如き熱情を驅て高潔なる理想を吐露せしものを見ざるなり一讀再讀又三讀愈々讀て愈々其妙味に堪へず予は遂に滿都幾百の書肆に就て普く古冊堆中を探り辛ふじて玆に二百餘冊を得たり苦學終日神倦み氣屈するに至る每に取て之を讀むに恍然として食を忘れずと云となし思へらく如斯の好文字若し山間氣淸き所に至り泉石に踞して靜に之を諷誦するを得ば更に幾段

快味あらんと依て狐裘を賣て又數冊を購ひ改綴して葦編數冊を作りやがて歸鄕の途に就くや百里の遠路荷ひ來て更に重きを覺へざりしあゝ足下は此孤獨憐むべき寒生の爲めに如何に貴重なる土產を玉ひしよ謹で玆に之を謝す

予が故鄕は湖東約十里名にし負ふ鈴鹿の嶺頭に在り今や朔風雪を吹て孤村蕭條たり予は此間に在て日夕至上者の寵祐に浴し仰ひては宇宙の偉大に放吟して竊かに神の大能を感嘆し俯しては自然の美妙を謠ひ造物主の光榮を讃揚しつゝ聖經を懷にして三々伍々たる茅屋の裡を見舞ひ爐邊一椀の澁茶に凝れる舌を濕ほし樸訥なる父老を相手に神の福音を傳へつゝある也如斯の山村素より談笑佳境に入るの友あるにあらず口角泡を吹く論客の來るにあらず山中暦日なし況んや新聞をや獨り火爐を擁して空しく過去の追念に耽る時唯松籟の颯々として空に響くを聞くのみ若し夫れ深夜人定まり天地寂然として萬象皆眠るの時寒燈の下靜に先きの韋編を把て之を繙く時其快何ぞ這ふとを得んや上は道念澄むが如き『理想之佳人』より下は熱感溢るゝが如き『迎春行』に至る迄所論百有餘篇一として吾人の意を得ざるなく足下吾黨なるか吾黨足下なるかを知らず讀み去り讀み來て同情同感の念勃々として禁ずると能はず果ては足下の狀貌風采謦咳に至る迄冉々として我面前に逼り來るを覺ゆる也ア、足下は何人ぞや何すれぞ予をして如斯ならしむるや予は今足下の文章を擧げて或は之を民友子に比し或は謙堂紉川に比して調々評論するの遑を有せず又如斯事を爲すを欲せざる者也何となれば人各其好む所に僻するを免れざるを知ればなり然りと雖ども吾人未だ當世の文字を讀みて足下の文章の如く痛く心臟を鼓動したる者はあらざるなり是素より其音調に一種崇高の氣韻を帶ぶるに因るものならんと雖ども又其言々句々恰かも泉水の混々として岩角より湧き出づるが如く赤誠熱情の肺肝中より鬱勃として迸しり出でしに因らずんばあらず宜なり言々躍立し字々飛動するの趣あるやア、足下は何人ぞや何すれぞ其筆端の靈氣予輩をして斯も敬慕の念を高たるや思ふに足下は啻々熱愛燃るが如き女學の啓沃者たるのみならず又實に熱烈なる青年の指導者なり聞說く足下頃日別に『評論』を發刊じて更に萬丈の氣焰を吐と思に昔日の女學雜誌に比して當に勇氣の百倍する有ん嘻々評論よ評論よ爾今健全なるや否や今や舊年將に去らんとして新年

未だ來らず窮陰漫々として天地寒し予は未だ爾の玉貌に接せずと雖も爾の歴史に於て略ぼ爾が沈痛の性を知れり又未だ爾が抱負を聞かずと雖も爾の友によりてよく爾の志を知れり任重くして前途遼遠なり請ふ自愛せよ

岩本先生足下予は暮れ行く年華を痛み獨り孤燈に對して幾度か足下の雜感を繙讀し敬慕の情切々として止め難く敢て大膽にも蕪辭を聯ねて衷情を開陳せり野人の鄙語素より禮を欠けりと雖も是も亦鈴鹿嶺頭我黨の爲めに上帝に祈る者なりと知らば一概に叱斥するの理もなけん予は敢て餘白を借らん杯の野心を挾む者にあらず唯一讀の榮を受くれば足れり不具

十二月二十日寒窓に孤爐を擁しつゝ　桂林子拜

片々

○吉田松陰の母

徳富氏、吉田松陰の傳を作りて曰く、彼の母、兒玉氏は、賢にして婦道あり、姑に事ふる至孝、子を敎ゆる則あり、仁恕勤儉、稼穡の勞に任じ自から馬を牧するに至る、嘗て彼女の寫眞を見るに、豐頤、細目、健全、溫厚の風、藹然として掩ふ可らざるものありと。

○解放后四十年の奴隷

敎授フランシス、ショウプ、「セワニー、レビウ」の近號に、「四十年后に於けるアンクル、トムス、ケビン」と題し、彼のストウ夫人が絶代の名著世に出でしのち正に四十年たる今日の狀況を論じて曰く、奴隷は反つて困苦せり、其嬉々たる面白氣は失せたり、罪を犯すこと十層倍となれり、昔し曾てあらざりし種類の犯罪をも爲すに至れり、彼等の幸福は反つて減じたり。左れど、人世終極の目的は、幸福にあらざることを知り、又、此の奴隷を解放したる白人種の間だに之が爲めに著しき德化を崇むりたることを思はゞ、實に奴隷解放の上には奇しき攝理ありき、而して彼名著は、驚ろくべき結果を生ぜしめし也と。

○旦那は廢娼ですか

群馬縣昨年末の廢娼論は、非常にてありき。存娼論者も、在ん限りの力を盡したりき。車夫すら、旦那は、廢娼ですか存娼ですかと聞きしのち、客を載せたる次第なりき。左れど、邪安くんぞ正に勝たんや。見事、廢娼論全勝を博し、去る三十一日限り、群馬縣下の妓樓は全廢せられたり。

時報

◎學校敎育

●女子敎育に就て　去る頃女子高等師範學校長細川潤次郎氏が同校父兄懇話會の席上に述べられたるうちの一二を左に摘錄せん

作法は女子敎育に必須のものなれば勿論從來と雖も家事科の中にありて其の大意は授けたれども實地練習は不行屆なりし抑作法は支那の書籍に據れば即禮の事にして其禮は則人の人たる道なれば作法は宜しく修身科中に置くべきものにして家事の一部となすべからずとの評議を以て過日發表の新規則には右作法を修身科中に加へ校舍中に疊數の一室を設けて之を實習するに至れり然れども學校にて作法を敎授すること到底十分ならず家庭にありては父母兄弟ありて之に對するの禮あり時に賓客の接待給仕配膳物品の授受等一に作法の材料に非ざるはなし然るに學校にありて唯其の摸型を敎ふるに過ぎず家庭の敎育に於て此の不十分を補定せられんことを希望す

躰操に付ては世上種々の論あるのみならず生徒自身成長するに從て幼少の時と異り之を厭ふの傾あり父兄諸君に於ても餘り活潑なる運動は女子の美風を損せざるやとの恐なき能はざるべし學校に於ても特に此に注意し研究の末遊戯の中規律の正しくして充分に身躰を運動し躰操の主旨に適するものを撰び之を採用するに至れり猶ほ一言し置きたきことあり當校は昨年四月廿五日　皇后陛下の行啓を仰き冥加至極に存し奉る所なり我校は特に　陛下の大御心を寄せ給ふ所にして創立の際には建築費用として巨額の金を賜はりしのみならず數回の行啓を仰ぐに至れり云々

●女子部の存廢　師範學校の女子部を廢止するは如何の理由あるにや又如何の必要あるにや相應の說を聞きたることなし去る月「富山縣會の問題」と題して諸新聞の報する所によれば同縣會にては昨年大多數を以て同縣の尋常師範學校の女子部を全廢したるも同縣知事は否認せしため同縣會議員中には今以て異樣の感情を抱くもの多く本年も同問題に就ては又々全廢せんとの意氣込なるが同縣會議員及び同校女生徒の間には虛構か揑造かは判然せざるも種々の好ましからぬ風說ありと又『大日本敎育新聞』は「女覺談一」と題して曰く

某縣會、客年欲レ廢二師範學校女子部一、蓋以三醜傳二醜聞一也、本年其廢止論、亦將二沸騰一、其首唱者議員某、招二一女生一、欲レ探二內幕一、此事果在レ欲レ貫二我論一耶、何思、某與二女生一酌、遂至レ漏二醜聲一、女子部廢止論、爲レ之將レ歸二消滅一、此其地新聞子所レ報也、輓近、濫唱二廢覺論一者、往々如レ此、女生之弊、亦概類レ之、論二廢覺一者、任二敎員一者、兩可二以鑒一焉、一讀三嘆、不レ堪二再讀一、

而して德久同縣知事の如きは女子部を復活せしめんとて種々盡力する所あるは事實にして同地は勿論何れの新聞も女子部の廢止に贊成するもの更らにあるなし然るに又々悲しき左の一報を得たり

●愈よ廢止　去る月十二日島根縣通常縣會に於て佐藤書記官番外席にありて女子部非廢止論を唱へたりしも多數は常置委員說を贊成し遂に師範學校女子部は廢止に決したり　然るに松江市の『松江日報』に一人の投書家あり「收賄と女子部」と題し女子部を廢止するに就きては同縣會議員に收賄の關係ありと傳ふとの噂を吹聽したり咄々大怪事にあらずや

●廣島高等女學校　同校は本年度より崇德敎社が同校の經費補助を增額したると同時に大に是が擴張を計り師範學校長、同校敎諭若くは本縣第三課學務係員等に商議員又は常議員となりて盡力あらんことを求め其承諾を得て今回彌々其規模を改革したり學科を豫科、本科、小學敎員必須學科、別科、英語科の五科に分ち女子に必用なる普通の學科を敎授し且つ茶式挿花等をも希望のものには之を授け女子の敎育をして遺憾なきことを計りたり云々

（廣島同愛新報）

◎美　談

●婦女の龜鑑　茨城縣久慈郡坂本村大字石名坂大塚とめの美行を慕ひ其揮毫を乞はんとて岩手縣陸前國氣仙郡盛高等小學校三四兩年生徒新沼きの外八名より申來りしに付石名坂訓導大內氏は早速とめに書を認めさせ直に送附したりまた同所の瀨尾政介二女ためも心掛のよき女にて學校に通ふことの出來ざる近所の子守娘等を集め修身上の談話より讀書算術などを敎えしかば其親々の喜び一ト方ならざりしとまた水戶市上市寺町立原寬氏の長女やゑ子（十六）も昨年高等小學校を卒業せし後連りに裁縫を習ひ居しが近頃は近隣の少女に無謝義にて其術を敎授せるを以ていづれも其親切に感ぜぬものなしといふ

（大日本敎育新聞）

●孝女美談　富山縣上新川郡上市町に四尾セキなる者あり年既に三十に達して操節無比其父一朝中風症に罹り身躰自由ならざるに至るやセキ夏は枕邊に侍して扇を揮ひ冬は身軀を擲して煖を取り或は之を負ふて寺院に至り或は之を援けて浴を取らしめ孝養盡さゞるなきを玆に六年其間常に身を勞し心を盡し以て家計を立て藥餌を求む頃日聲響傳はりて令尹の耳に達するや令尹金圓を與へて之を旌表す

（郵便報知新聞）

◎風　紀

●本年は如何　昨年下半季は上毛を始しめ秋田、宮城、和歌山、岐阜、山梨、愛知、滋賀其他三四の縣會にては遊郭問題に關して隨分賑かにも又忌まわしきこともありしが騷ぎに伴ひし効果左程見るべきもの少かりし本年は果して如何去る月末に得たる報は凡そ左の如し

●咄々怪談　去る月十二日上毛の縣會に提出せられしは公娼設置の建議なり此建議を提出したる議員は左の三氏なりといふ

佐位郡選出、桑原靜一。　利根郡選出、增田武市。　同郡選出、永井定義。

「上毛新聞」稱して曰く嗚呼此硬正雄拔の議員と硬正雄拔もし靈あらば爲めに泣かん又報ずるものあり曰く上毛公娼大論會は「公娼論賛成の議員は主義の如何を問はず再撰に盡力する事」と決議案を大多數にて可决せりと嗚呼此大多數の翟

●營業の停止　仙臺市遊廓常盤町が再度延期の期限は去る二十五日迄なり樓主等は頭痛をやみ中々氣の毒の樣あり更らに延期を出願せしも許されず遂に停止を命ぜられたりと縣治は實にかくあり度きものなり上毛當年の廢娼知事、議員果して如何の感をなす

●岐阜の怪事　同縣郡上郡八幡町の有力者は全町に遊廓を設置せんとて目下協議中なるが既に該協議整ひ愈々其準備をなし本縣知事に之が請願をなさん爲め和田親太郎氏出岐せし由　（岐阜民報）

●妄論果して敗れたり　愛知縣下名古屋、熱田、岡崎、豐橋の四所に娼廓あり其賦金年額七万餘圓にして數年來縣會郡市間の爭點となり居たるが昨年の同縣會は滿場一致を以て「娼廓は風俗を亂すを以て悉皆郊外數里の僻地に移轉せしむべし」との建議を縣知事に提出したるが本年の同縣會にては又た大多數を以て同縣下武豐一ノ宮津島等逐年繁盛に赴くの地には公娼の允許ありたし」との建議を可決し同じく知事に提出したりとの報に接し同縣會に一片の良心あるや否やを疑へり然るに去る廿一日縣會の終局に於て而も三讀會に於て否决されたり快哉と云ふべし

（二十、二十一日、新愛知參看）

◎片　々

●原トヨ女史長崎に聘せらる　博多大濱町の醫師原三信氏の令妹（蘇仙翁の令孃）トヨ女史生來美術思想に富み繪畫、繡等を學びて大に上達し過般は依頼に應じて四季の花鳥を四枚折の屛風に繡ひ出したるものを造りしが美事に出來あがり是れは外國へ輸送せるものゝよしなりしが長崎なる活水女學校長（英人女教師）は女史の手に成りたる右の屛風を見て大に其技倆に感じ今回女史を全校に聘することゝ爲り女史は去る廿三日全地を出發し赴任し來りし由にて嚴君蘇仙翁は遊び旁々女史を送つて長崎に來りたりといふ　（長崎新報）

●女學校と教會堂　安部井磐根氏等の廢行條約廢行建議案の理由書中に山梨英和女學校及び甲府教會堂の敷地及び建物も本邦人の名義にて其實外人の所有なるが如く掲げあれども此は全たく事實相違にて女學校は縣下有志の義捐金より成り立て校主新海榮太郎氏の所有に屬し教會堂は縣下基督教信徒の寄附金より成り立て信徒秋山平兵衛氏外二名の所有に屬せり此は縣下にては明白の事實として何人も疑ひを挾まざる所なれども女學校は現在その教授上に於て外國婦人を教師とし教會堂も今尚ほ幾分の關係を外國傳道師との間に存するならんが故に世の知らざるもの二者の土地及び建物までも外國人の所有なるが如く一概に思ひ做せる向もあらんなれど事實は全たく右の如くなり之につき山梨英和女學校主新海榮太郎氏は淺尾代議士に向ひ事實錯誤の旨を安部井氏等へ通知せんことを望みたりと云　（山梨日々新聞）

●撰拔の女生徒　廣嶋縣尋常師範學校に於ては來四月に施行する筈なる女子高等師範學校入學試驗に應ずべき女生徒三名を撰拔せしが其氏名は左の如しといふ

松　村　久。　柄　本　み　ち。　武　藤　加　芽。

●私立順正女學校職員の美擧　岡山縣上房郡高梁向町私立順正校職員諸子が申合せ同町各家に雇用する子守女等の貧民社會の婦女子に讀書算術裁縫等を無謝義無束脩にて教授することを評決し先般來大字大工町家本某の借宅に於て每周期二回宛午后六時より九時迄三時間教授し居れるが昨今は十數名の生徒ありと美擧と云ふべし　（中國民報）

●小學生徒の貯金額　甲府尋常高等小學校にては二十六年より生徒の驛遞貯金を開始せしが十二月の現在額は左の如くなりしといふ

教場別	預り金高（圓）	人員	平均一人當り（圓）
本校	二〇六、五六七	一〇〇	二、〇六六
學生	五九四、九三八	二八七	二、〇七三
上府中	一九四、一七九	一一四	一、七〇三
飯沼	一四七、七六三	五八	二、五四八
稻門	一四一、四四四	一〇一	一、四〇〇
合計	一、二八四、八九一	六六〇	一、九四七

通　信

會津通信　通信員報

●白鶴尙齡會　去月十五日若松七日町萬喜樓に於て七十歲以上の老翁相會して表題の如き會合を催せしに會せしもの五十五名皆鶴髮童顏仙骨脫然風塵以外の人の如し最高齡者は新田某（九十三歲）にして各自歡を盡し快を極め其老を養ひたりといふ

●私立病院　若松育兒會の主唱により多くの名士の賛成を得て日本赤十字社醫員佐々木轍氏の派出を許可せられ私立濟生病院なるものを起し專ら慈惠を旨とし內科外眼科耳科婦人科の治療を始めたり若松針屋名古屋町に於て

●廢娼建議書　若松婦人會の發起にて百有余名の調印を得て去月二十六日目下開會中の縣會に向て廢娼建議書を差出したるに議長は快く之を受取り畢に婦人の手によりてかくまでに勉められたるは感ずべきの至なり云々といへりとぞ

●鳳鳴會　は福嶋町にある佛教的團躰なるが其事實は育兒にして其數は乙種卽ち父兄等に例月敎育料を惠與し春秋二期に時服を給與する者九名又甲種卽ち同會に引取り保母をして養育せしむるもの一名にして近頃名響會頭として目下縣知事を推撰したりと聞く

新年附録

はしがき

たゞ年頭に帋をふやして例になき寄せぶみを掲げ、而して終年これにつゞべきもの〻無きは面白からずとて、此度びの附錄十ひらあまりの帋に收めたるは、この後、月に一回もしくは二回、かならず例として掲ぐべきもの〻見本を用ひぬ。されば、此の年頭第一の女學雜誌をとつて、其掲げたる惣ての欄の數を計れば今後、番に順がひ次を追ひ、いれかへて皆な必らず掲載せらるべきものと知る也。よつて之を女學雜誌全躰の見本となし、年のはじめの見參となす。

我やどの梅にならひてみよし此の
山のゆきをも花とこそ見れ。

山中淸況梅兼レ雪、
此際間人我共レ君。

文しらべ

鷹山公、輔儲訓

左は、安永五年のとき、世子初めて出府せらる〻砌、上杉鷹山公が、近侍に賜わりし御書なり。子をそだて、幼けなきに敎ゆるの道、大方之れにてつくす。左るにても、一百十八年のむかし、身王侯にして人情を知るを容易からぬ御方が、かくまで日進方今の敎育術にひとしき秘訣を知り玉ひしと、かしこき限りなる哉。全躰すべて是れ、誠と涙なり。何れのふしをか殊に優れりとせん。左れど、わきて注意すべき條りに圏點を附しぬ。其驚ろくべき細やかなる心掛けの程を味わひ見よ。また、其へりくだりて臣下にもいめ、そが勤勞をいたわり玉ふのふし〳〵、實に感泣の外なし。臣下一身を献げて公けに奉ぜしむ、當に然るべき也。

明治二十七年の春　石翁記

喜平次殿訓導の儀面々如何に相心得候哉條々書記し申出へきの旨申達候處則此間申聞候趣委細承知せしめ候甚確論と存候何れも心を盡し候次第淺からず滿足に存候猶此上自分存慮をも申達候樣に申聞候間左に記し披見に入候異論も是あり候はゝ幾許も申聞へく候

一大凡人君の通弊は玉簾深き中に長養し富貴に沈淪せしめ候間おのづから世事の艱苦なる事をも辨ぜず下民の窶きにも疎く是有り候是よりして驕泰の情日々に長じ奢侈の心月々に盛にしていつしか天職に供し候大切なる事も忘却せしめ先祖より受繼候社稷人民をも我物の樣に心得下を損して己に益し諫諍を遠ざけ諂諛を近つけ終には家國を亡し候事にも成行候是性來の悪質なるにも是なく候得共習慣のしからしむる處に候故に古より世子を輔導致し候事は士禮を以すと是あり恭敬遜讓を第一に示し候事に候昔は天子の太子と雖大學校に入て國民と齒讓し士に均く禮を抗して其情を卑し或は闕を過れば下り廟を過れば趨る共是あり候世子の貴き身柄に候得共猶上に君あり父あり長ある事を示し先に賤して後に貴き事を知らしむるの敎に候臣子の道を能了解致し候上にて僅に君父の道をも知り得る事に候是故に今日世子の內は何事も恭遜を專一と致候事に是あるべく候今年喜平次殿同道せしめ候事も東都の繁華豪族の形勢を見聞致され候爲にも是なく風流奇麗の樣子を習慣致させ候儀にも是なく候只國元發駕の日よりして小屋從の姿に出立たれ艱難不自由の事にも逢ひ申されて一とせ武藏野の露にしぼたれ申され候はゝ少しは下民の情にも達し是よりしてはてしなき才も生し秋の月のくまなき德にも進み申され候樣に致度迄の事に候然らば面々も此本根の志を能了得し事々物々の上に付て敎諭是あり度事に候

一總て敎と申ものは自得を貴び候事に候一隅を擧て三隅を反す共之れあり憤せざれば啓せず悱せざれば發せず共之れあり候强て此方よりの仕込にては必向へ入事の淺きものに候只此方よりは其緒のみを示し向の樣子次第に隨て段々導き候と鐘の響に應し候如くに之れ有度候何とやら手ゆるきとの樣に思はれ候へ共之れを敎の術とは申候古聖人の敎は空理を談ぜず物に屬して導き候とに候前にも申候恭敬遜讓と申事も口舌の上にて斗りは行屆かず候恭敬遜讓の姿貌を

拵へて夫れを修行致し候へは始めの程は何たる事共辨へず迷惑難儀なる様に思ひ候とも日を重ね月を經候に隨ていつしか我物と成り獨其道をも合點せしめ候樣に相成かの恭敬遜讓も性質の様に思はれ候事誠に敎の妙なる場所に候此儀を能了解致し敎導之れあり度事に候

一子を育候事も花樹に培するが如くなることに候春を待て莟める花を年の內より咲せんと色々樣々の手入をし室に入れ火にあて候へは其花咲とは雖陽和の時を得し花樹に比し候へは其色香も薄く賞玩も是なく候人の育も其如くに候事ら成長の時に臨み強て成人の道を以て譴責せしめ候時は英邁の氣象を折き或は病身となし又は手薄く成立候只其時を失はさることそ專要に候へ論語の開卷第一儀にも時習と是あり候細か敷事は先々夫迄にして英氣を長し度事に候只本根の筋違なき樣に敎諭是有度事に候

一千萬句も入らす唯人君は學術に止り候古今の治亂世の盛衰和漢の制度人情物理をも通知するに是なく候ては治國安民の大業はなし難き事に候是を知らんとは學術に止り候學術とは古聖人の道を稽古致す事に候其道を稽古致候には書を讀むより外の業は是なく候唯々學術出精是有様に敎誨是あり度事に候

一武技の事も夫々學ばれ候樣に致度候上の好む所下是より甚しと是有り候上にて武を好み申さすして下にて其道行はれ候事は是なく候文武は車の兩輪に譬へ一を闕て叶はさる事に候然らは弓馬刀術等段々入精是有り候樣に敎誨是あるへきことに候

一性質と申ものは迚も取替難事に候才を達し德を成すと申事も皆其性來の持前を學術の力にて生育致候事に候悪き性質の者も皆よく學び候上は其悪き事は自ら知り得ることに候へは強て性質の論には及ばさる事に候去なから敎導の日には其性如何と云ふを知り得候はねば敎の道を失ふ事に候人性は大かた同し樣なるものに候へ共習と申ものにて遙に賢愚の差別は出來り候歐陽子が詞に性は聖人の先とする所に非ずと云置しは實にさる事に候只敎と習とに大事は止り候事是あるべく候。

右數條は大體の論に候是のみにては今日取扱の上心得も定め難き筈に候粗左に記し申達候

一恭遜は貌に屬し敬讓は心に生じ候此恭遜の貌を捺ふと申事は如何にと申に何れもの取扱の次第を恭遜に致し候事第一なるべく候此の頃見聞に及候處喜平次殿へ對し立ながら詞をかはし又は次の間より答を致候事邂逅には之あり候尤幼稚の喜平次殿用向申付られ候事も數多又は閙しき節など二六時中去とは餘義なく察し入候此上迚も是を咎め候存慮は之れなく候しかしヶ様の事より自然と喜平次殿恭遜の貌も薄く成行候一とを申伸候にも屹と貌を直ふし詞を正ふして申伸候時は自づから喜平次殿も伏轉び挨拶も之れなく候是も始めの内は氣詰究屈にも思はれへく候得共自然と其儀に習ひ申され候へは後々は此方より貌も正くして物を申付られ候様に相成候始にも申通り中〳〵二六時中ヶ様にばかりは行屆かざる事に候得共十度に二三度も心掛候はゝ相成べく候夫れだけの益に是有候勿論是のみに限らず事々物々の上には色々之れあるべく候得共恭遜の姿貌を扱ふと云ふ其規矩を示すのみに候

一敬讓を心にもたせ候敎の貌とは身柄を卑く構へ候とを扱ふにて候譬へは駿河守殿幸之助殿又は益之助殿な扱へ應對の振合勿論大家と云ひ本家の世子に候へは自分同様にても相濟むべき事に候へ共未幼年の儀且願も相濟さる以前に候へは一等卑く構へられ候様に是あり度候其外大夫小姓頭又は年老長者などへは皆此心得是あり度候是より自然に賢に下り能に讓り候心も生し候儀に候是又一端に候武藏野の露に先ほたれ候と申事は萬事を艱難不自由に取扱候事に候此儀は甚多端なる事に候へは追々口舌の評議に盡すべく候

一強て成人の道を以て督責せしめ候へば英邁の氣長し兼候と申事は朝夕坐作進退の上に付て是も宜しからず彼も惡しと申て狂ひ樂み申せる事を事なく止め候はゞ幼稚の内只居も相成らず去れば迚止り候事も成り難き時は去とは迷惑なる事に是あるべく候迷惑なる心より氣もちゞみ申ものに候狂ひ樂み申さるゝ事も時としては十分に是有り度候其節は面々も痛入候得共年を忘れて相手致し呉候様に頼入候度々過候節は其時事を構へて移し申べく候移やすきも幼稚の習ひに候只々口に敎ゆるとを愼み事に敎る事を專要と心得申べき事に候

一學術出精是ある様に教誨致候事も只督責を嚴に致候共只今時分義理文章の辨へも是なく候へば去とは面白からざる物に候面白からざるより進みも是なく進みなきより退屈も付申ものに候此事も左右に其事是あり候へば自然と夫れに移り申ものに候孟母三遷の教と申も爰の事に候是に依り面々當番の節此度相渡し候書物又草子物語様の類何れにても宜敷候間不斷に讀書會讀是有度候其身へばかり勤勉せしめ候とにては行屆かず候其外射藝馬事刀術の類何れも道具は屋形に是あり候間面々出精是有へく候喜平次殿よりは面々の出精を重く致すへく候是面々も浮世の雜談に詰所の疊を暖め候ばかりよりは其德益も少からず又は喜平次殿大なる進みに相成候自分幼少の節亂舞の事さして好ざる事故出精も薄く候へしに　大殿様御好遊され候事故附々も督責せしめ候を自分幼少より附添候やすといへる婦人今は廣瀬と申者に候此者自分とひとつになり經政の謠本を自づから書寫し終に一番覺て自分に亂舞を進 候事是あり候其品は兎に角教の術をば得たる儀婦人の志にはやさしき事と今に感し居候此所能々勘辨是有度事に候

一吝嗇の心性來にも之れあるべく候得共諺にも氏より生育と申事の候吝嗇の心は財の乏しきより生じ候事に候取扱の上に其心得だに是あり候はゞさして憂ふる事は是ある間敷候其取扱方と申は宜き品を少しく與へ候より宜しからざる品を多く與へ候様なると是あるべく候是は筋多きとに候へば筆談には盡し難く候

一喜平次殿才に不足は是なく候才の餘り候より物毎に心付も細かにやかましく是有り候細かにやかましきを此方よりも細かにやかましく教訓致候ては影を惡て趨ると申す譬への如く愈細かにやかましく成行候只日用の事を靜に大まかに取扱申べき事に候

一喜平次殿當分剛氣に相見へ候得共皆以銳氣秀發する迄に候剛氣は全く薄く是あり候剛氣は根强く物に屈する氣なきを申候銳氣はするとしと讀て切れ味はやり氣の事を申候銳氣は人君に望む事は是なく候へ共しかし銳氣を剛氣の種と爲さず候へば剛氣を長し候とは是なく候先々銳氣を挫かず生育候內より剛氣に轉し候様に是あり度候

一喜平次殿險忌の性も隨分是あり候其內又仁恕の心も成程是

あり候險忌の性に深く頓着なく仁恕の心を長し候樣に生育是あり候へば追々險忌の性は薄く成行申べく候此所能々勘辨是あり度候

右書記し候趣は寔に以萬分の一にして中々細々の事迄は毛頴の關る所に是なく候面々申聞候通其人を撰み傅役申付候事甚緊要の儀にて和漢古今の敎是に增候と是なく候へば甚適切の高論と服し入候追々其沙汰にも及べく候去りながら左右朝夕致候面々の心得筋違ひ候ては縱ひ傅役を申付候共孟子の所謂一薛居州にて手も伸び申間敷候毫厘に失すれは千里に謬ると易にも是有候唯一日も大事に候へば先々心付候通申達候醫者の病を治候樣なる物にて陰陽虚實の境を察し當然の病は其儘にして其症の本根を療し候へば其病も隨て癒候事に候今日の敎會にも此心得是有事に候呉々も敎は數少く其要を得候事と詞を以てせずして物を以するを申に止候猶此上面々一際出精是有度候國の安危は世子の身に掛候事も候ば大切なるに事候面々朝暮の事見聞せしめ候所痛入たる事共に候へ共及丈の敎誨に猶も心を盡し如在是なき樣に呉々賴入計に候不悉

小說

小むすめ

とよ子

氷の塊りかとも見ゆる冬の月は、キラ〳〵とした淒しい顏を大空に見せては居れど、人は皆夜寒に怖ぢてや、各家戸を閉ぢたれば、まだ宵ながら四邊寂として音もなし。さなきだに陰氣なる家の、物淋しさは愈增しぬ。二分じんのランプ影暗く、障子の塵、疊の破れも、眼に立ちては見えねど、病みたる父の、肉落ち骨立ちてさながら、現世の人とも思はれぬが、薄き蒲團に包まれて、壁に向ひ臥したる後姿のみは、歷然として少女の胸を打ちぬ。父は病苦と夜寒とに、寐ても寐付かれずや、コホン〳〵と咳く聲の、骨身に徹へてセツナそうなるにぞ、其都度少女は、慌て〻父が枕上なる洗ひ洒しの布片を取りて父に與へ、赤きもの〻交りたる啖を拭はせて、又しよんぼりと坐り居ぬ。

少女といふは年の頃十四五、勝れたる容姿といふにはあらね

ど、優形にて色白く、黒色勝なる眼元愛らしければ、これに美しき服着せたらんには、天晴れ一個の、可憐孃とも見ゆるならむが、身装の余りに見苦しきと、水仕の業を執ればにや、手の指赤く膨らみて、硬太りに太りたる二つ、小奇麗なる顔に似合しからぬやうにて、何となく憐れ氣なり。淋しさと心細さは、四邊より此少女を襲へばや、少女は何をか思ひ出して、しく／＼と泣居たり。

お袖／＼と力なき呼聲は、覺束なくも此寂寞を破りて、蒲團の内より漏れ出ぬ。お袖はハッと父の方を見遣れば、父は彼方を向きたるまゝ「お母さんは何處かへ行たかい「ハイ先刻差配のおばさんの許まで行て來るといふて、「フムまた出歩行か、あゝ困つたもんだ。己れが床て居るとも、お前がそうして苦勞するのも、氣にならないのかナー。モー彼是九時にもなるだらふ、一寸行て呼でお出で。お袖はハイと應答しが、母が近所へ出歩行くは、今日に始まりたる事にも非ず。昨日も隣りへ行たるまゝ、久しく歸り來さりしかば、父の吩咐にて呼に行たるに、母は其時眼に角立てゝ「何か用かい、用でなければお母さんが歸るまで來なくッても宜しい。朝から晩まで病人の顔はかり見て居ては、氣がクサ／＼してお母さんまで病氣が出そうだ、夫れにお父さんも、昨日や今日の病人ではなし、久しい間の事だから、そう後生大事に、二人が附添て居なくつても、ちつとは我慢をしたがよい。何だね此子は、何をグツ／＼してるんだ。サッ／＼と歸つてお父さんにさうおいひ。歸る時分が來たら、呼びによこさなくッても歸るッと。大變に叱られたれば、今日も亦其通り、呼びに行たとて歸らるゝ事にてはなかるべし。なまじい呼に行て又叱られ、歸つてから昨日のやうに、お父さんにか、い、おたられては夫れも苦勞と、思ひ返して父に向ひ「ナニネお父さん、お母さんは今に歸つて來るだらふよ。何ぞ用なら其間、私が「イヤ別に用事ではないが、お前は晝中働らいて、勞れても居る事だから、責て夜だけでも、お母さんに代らせやうと思つてよ。「夫なれば猶の事、私しはちつとも睡くはないから。お父さん氣を揉まないでお呉れ。夫よりはお母さんの歸るまで、背など摩擦つて上げやうと、小さき手にて身一ッに父の看護を引受けつ。別段辛い顔もせぬ、娘の心の優しさに、父の心も和ぎけむ、摩擦られながら、うと／＼と寢みかゝりぬ。

お袖今歸つたよ、表の戶鎖りをしてお呉れ。何だチー宵の內から此暗さは、「オヤお母さんお歸り、何チお母さんは居ぬし、お父さんも寐たから、夫で贅費だと思つてランプの心を引込て置たんだァチ。ハァ亘燵——亘燵は疾うに拵らへて、今しがたお母さんの寐衣も掛けて置たよ。アノチお母さん、晩方買つて來た炭團は大變に損だよ。小さくつて柔らかで、今亘燵を明けて見たらもうちやんと、半分から灰になつてるんだもの、同じ一錢に八つんなら、先の方が余程得だよ。今度から先の家へ行つて買つて來ようチーと如何に貧しく暮せばとて、十四や十五の小娘の、口から出やう詞とも、思はれぬほど氣の注くは、是も平素から何や角と、母に代りて世帶の苦勞を、させらるゝ故と知られたり。

母は亘燵へあたりながら、ランプの火にて一二服煙草を吸ひ忘れつたそうにポン〳〵と灰吹を叩き「お袖一寸爰へおいで、お前に聞たい事がある。何かいお前は隣りの花ちやんか誰かに、お母さんの事を惡く言つて聞せた覺へがあるだらふ。「何をつて、お母さんがお前を慘くするツてサ思ひ掛なき問にお袖は眼を見張りて母の顏を打守り、「イヽエお母さん、誰がそんな事をいふもんかね。私しは何もお母さんの事を「ソリヤァあるとはいはれまい。けれど今夜差配の女房さんに聞きヤァ、何でも私が大變に繼子イヂメでもするやうに、近所で噂をして居るとサ。大方お前が花ちやんか誰かに云ひ告けたのだらふ。「イヽエ何もいやァしない。「でも差配の女房さんが、こういふ事をいつたよ。お前さんは實眞にお仕合せだ、お袖さんが何も角もお爲だからといふから。ナゼそんな事をと聞て見ると、隣りの花ちやんがいつてたそうだ。お隣りでは、お母さんは何も爲ないで、お袖さんばかりが家の事や、お父さんの介抱をして居て、ほんとにお袖さんは可愛そふだとよ。何かいお母さんはそんなに何も爲ないかい。夫りやもうお前も十五だし、女の子の事でもあるから、何でも仕習らつて置ないと、先へよつてからお前が困ると思つて、お飯も洗濯も、私が爲る方が早いのだけれど、煩勞を見てお前に爲せて遣るのは、みんなお前の爲を思ふからッだ。お父さんの看病だつても其通り、迚もお父さんはよくならない事は極つてるし、もう長い事はあるまいと思ふから、亡なつた後にお前が殘念がらないやうにと思つて、一つでもお前に爲すや

うにして遣るんだアネ。夫れをそうとも思はないで、如何に成さぬ中の繼子根性とはいへ、私しばかし慘く遣ふなんて、近所へ觸れ廻すといふ事があるものかネ。ほんとにお前は太い子だよ。おッ母さんの前でばかし、ホイ〳〵いつて、お父さんの事でも何でも私しがするから。おッ母さんは搆ないでおいでなんて、お上手を遣つてサ、蔭へ廻つて讒訴するなんッてほんとうに呆れたものだよ。是がおッ母さんだつて、自分が惡くいはれないやうにと思つて、お前の爲を思はないなら、お前には何も爲せずに、夫こそチヤンと遊ばせて置て、おッ母さんが何も角もするわネ。そうすると人に彼是いはれる事もなし、お父さんにイヤに氣を廻させる事もないんだけれど、夫では今もいふ通り、お前の爲にならナイからだ。夫や是やのおッ母さんの氣苦勞は思はないで、おッ母さんを惡くいふとは、ほんとうに親の心子知らずとは此事だよ。何だとへ、私しは何もいはないと。言はないものがナゼ人が知つて升。お前が何もいはないに、誰がそんな事にまで、世話を燒くものがあるもんかネ。ヘン、いくらおッ母さんがお心善しだつて、餘り馬鹿におしでないよ。言つたら言つたでいゝから、おッ母さんも是から其積りにする計りの事だ。エ、何だとへ、怒られちやア困るとへ、困るならナゼ怒られるやうな蔭口をきくんだネー。と並べ立たる百千言、詞は巧みに飾れども、飾りきられぬ行は、近所の人の眼に觸れて、お袖は何も言はずとも、噂さるるは我と我、身の行にありぞとも、心付でや一筋に、お袖が繼子根性から人に告げ口せしものと、思ひ僻めて胸安からず、猶も詞を繼がむとす。

何時の程にか目覺けむ、父は何をか言ひ出むとして、コホン〳〵と咳き入りぬ。繼母はジロリ其方を見遣りたるまゝ、纔に口を噤みぬ。お袖は口虎を逃れし心地、是を機會に父の邊りへ走行けり。病父はお袖の介抱に漸く動氣治まりけむ、暫くありて口を開き「お霜、己れも先刻から聞て居たが、小供を捉へて、餘り喧しう云ひなさんな。お袖の事はヤアそれでも善いとして、小供のやうなものに病人を任せ、夜歩行するおぬしも餘り譽めたものでもあるまい。永うとはいはぬ、切て己れは寐返りの出來るやうになる迄なりとも、少しはめんどうを見てお呉れ。いくら能く氣を注けるからッて、お袖はまだ小供だ、一人では手の屆かぬ所もある。と寄らず障らぬ

よ、とかすかにいへば「いなわれは男なり、幾日ものたべずとてなにかあらん、母様のやみ玉へるに、いかで、又今宵もこのまゝには、とて引はなちてかけ出る十二三の男子、戸口迄は勢よかりしが、降しきる雪の中を、傘だにもたで、我家の軒端に茫然と其儘たゝずみて、はてはすゝりなきに聲をのみて身をふるはせぬ。家の中には吹入るゝ夜風や身にしむらん、咳の聲ます〱はげしく聞ゆる折しも、これもこの男子と同じ程のたけなるが、手に何やらんかぞへつゝ雪をよけて、この軒のちかくを過るをおとよりしづかにしたがふこの男の子、あなたの小路にちひさき二つのかげは入ぬ

中

なべやきうどんといふ聲聞つけて、以前の家よりはせ出るかの男の子、呼とゞめて兩手に持て、母の前に据ゆるに、いぶかしやとはいひながら、ことゝふものうげなるさまに、寢ながら食するは、げに三日が程ものたうべぬにやあらん、舌うちしつゝ我子をみてそれといはぬ禮心もあさましき限なり、子はせき入母を氣づかひてものいはんとするを、手をふりてとゞめつゝわれも一つを食し、一片の疊に敷ものもなき上に横たはらんとする時、雪明りにうすあかるきこの家に火の光さし入て人音聞ゆ男の子おどろきて、立出れば、こゝぞ〱とて五六人の男女入立て「やよ汝の孝行の噂、けふ教會にて聞てクリスマスの送り物、よそよりうけしを殘りなくやらんとてきたりしなり、又これは某よりの惠の金一圓、他に若干は人々の志なり、心おきなくうけてなほ孝行せよ、母に藥用させて本復をまていざ夜更ぬまにとて立歸る、病める母はいざり出であとをふしおがみ、子は外に立出てあきれしさまにあとをみおくりしが、わが手にわたされし金をみてうちうなづきつゝ母をいたはりふさせ、今おくられし肩掛シャツ又はにつかぬ花がさしの類、みるもうるはしき菓子の品々、母にもあたへおのれも食し、又は肩掛うちきせわれはシャツなどきて足を空なる暫時のいそがしさ、殘れるものは側に一山にしてしばしうちながめしが、母のスヤ〱と眠るをみてしづかに戸をひきあけて外に出ぬ

下

川原に材木つみかさねたるうしろの方、細くかすかによぶ聲はかの男の子なりまだねぶれるかこのさむき夜に、わが如く家もなきこの川原に、女の身のかよわきを、さきにわが汝の手より奪ひし金をかへさんとてきつるなるに、おきてよや、といへどもこたへぬ少女の顔つく〴〵とみて、さきには母様にものわげたかりしあまりに、心づかざりしが、あゝ朝夕こゝらにものうへるかの子なりしよ、さらば、まちね、よきものとらせん、まづこの金はおさめよや、こゝにおきては又わが如きまづしき子やとらん、袂やある、こゝへいれなんには目覺て、必心付べし、さるにてもわが錢をとりしをもしらで、ゆたかに寐ぶれるよ、とうちつぶやきてはせ去りしが、又東の空にやゝ紅をおぶる頃、走きたりて「まだねぶれるよ、このかざしわれにはせんなし、いざかざしてたのしめ、この菓子われには餘りあり、たうべよとて側に居より、肩に手をかけておしうごかせば、動乎とそのまゝにたほれ伏に、われもうち重なり倒れしか立上りてはしめて心づけはこの少女の五躰はつもれる雪より氷よりひえにひえはてゝ持こし簪は白妙の雪にさゝりておのづからの手向の花となりけらし

隨感

○一家の君主其臣を招く

世に人の給料ほど廉なるものはあらじ、左れば、働らきある人の給料ほど安きものは更にあるまじくとは思わるれ。然るに、金銀の器、にしき綾うすものなんどの衣裳には費えを惜まずして、人の給料に吝さかなるこそ心得ね。

下女下男は、はしたなきものとして、兎角その撰擇に心を掛けず、之に給すべき料を世の常の倍にすとも、必らず善き人物を手に入れんとする用心など方今毫末もなし。下女は、内君の侍、下男は、主人の家來にはあらずや。たとひ、一人二人の小人數とは云へ、亦これ古の君主、其臣を招くの覺悟を存せずして可なるべきや。

余は、一家の寶たる子女の身の上を念ふにつけて、取分け此感に切なりとす。幼なき子女は、父の感化を蒙むると甚はだ少なく、先以て、母の躾けに染まるの外は、多分は、下男下

女の風儀によりて左右せらるゝ也。而して姆、子女の類に至りては、その勢力一きはにして、寧ろ驚ろくべく怖るべきものあらんとする也。然るを、此等强大の感化に善悪を慮ばかることなくして、只管ら掛念を末事の端に存す。世の父母たるものは、深く戒しめずんばある可らず。

○稚兒への贈り物

幼なき稚兒等にとて遣ひ物する人は、深切に心すべきこと最と多かるべけれ。一例を擧れば、三四五才の男女二人の同胞あらん方に、孃には毬、若には太鼓と、二樣に分けて遣らんと一と通りの用心にてはあれど、凡そ五六才以下の男女は、未だ甚だしく其嗜好を異にせずして、大抵は同じきものを好むと云ふことすらあるに、幼なき人の癖として、何ものも欲しく何ものも珍らしく、特には己れ所有せずして他のみ弄ぞぶものなど見れば尚更らに欲望を起すものゆへ、斯の如く二樣異形の物品を一ツ〳〵分配するは、喧嘩の種となるものなり。然るに、喧嘩は、騒がしきのみにあらず、之よりヒガミを生じ、ソネミを生じ、卑吝我慾の劣情を生ずるなど、仲々に恐ろしき影響あらんとす。故に、好意をもて遣ひ物する人は、更に此邊の注意あらまほしく、親たるものが、其兒に物を與ふる時には、此類の戒心言ふまでもなかるべし。

○鰹節主義、鷄卵折主義

遣ひ物の現態こそ、苦々しきの限りにてあれ。元來、情を物に寓して、眞心を外品に形はすの本意なるに、今人の相ひ贈答するは、其旨またく之と異なる。一片世情の俗習が、冷やかなる義理詮議か、もしくは豪奢をしめし、虚榮にほこるの類、滔々として皆これ也。曰く、あげなければ、濟むまい乎、悪るからう乎。此の乎の一字千万無量の奥底を露白す。其贈品は、友情あふれ、信切濃やかなるによつてにあらず、人知れぬ趣構と、慘澹たる經營とを經たる工夫によつてにあらず。單にこれ、俗情のはじき一發して財布より錢を出し、錢即坐に變身して直段どほりの品物となりたる耳。此を以て、人の贈品をうくるや、其價格を判して謝意を加減す。之は幾らほどのものならんと詮議するに及んで、醜、極度に達すと言べし。此故に、有情の人は、輕々しく贈遣せず、寧ろ其潔性

に僻し、世態に反動して、何等の品をも寄せざる也。此に於てか、人之を許して、迂となし吝となし、反つて熱情多恨の涙を察せず。世は淺々しきものにあらずや。夫れ、金錢を受けざる人に、必らず價ある品物を寄せて捨費に酬ひんと欲しもしくは、他の實用を念ふて特更ら其品を送るのたぐひ、苟くも、理由あり、情味あるときは、必らずしも咎めず。此等や、恕すべきの據處もなくして、例の鰹節主義、鷄卵折主義に出る族のます／＼多くなりゆくこそ歎かはしけれ。

○何如にして年賀を爲さん

「近縣旅行」と云ふ、調寶なる遁辭とし〳〵に流行し、士人間にあるまじき無禮の所作なりとて、去年は太たく之に慷慨したる新聞紙もあり、其裏を掻きて「拙者在宅致す」との廣告を出せし人もありき。勢極まつて一變すとは、此邊の事か。今年は、三四年前來の例に比較すれば、かの近縣旅行の廣告太たく減じたるが如し。之を慶せんか、將た一笑に附せんか。陽氣來復し、乾坤一轉するの機、友と相見て舊年のもやくやを微笑に附し、洗つて新鮮の氣象を喚起せんと當に然るべきことにてはあれど、酒氣紛々、俗氣醜々として、一年の尤とも嚴そかなる機會を汚がされん間は、一家相携さへ、もしくは知友相伴なつて、閑雅優靜の地に、梅蕾を將然に味はひ、以て徐むろに春天の遊びを爲さんとするも、必らずしも咎むべきにあらず、交際しげく、來往數百を以て算する人士にありては、到底、封信、端書、名刺の類にて新禧を相祝するの外あるべからず。

左れど、元旦は猶ほクリスマスの如く、日本のイルピングにして、昔時のお正月を追懷せば、今の祝式に慽みを遣るべきもの多かるべけれ。城樓の太鼓、紫の雲にひゞきて、快ちよき烏の聲、並木松を青くし、門を揭ぐれば、松竹朝たの露に緑を滴たらして、一塵たゞず、春はすでに千門万戸の表にあり、男性みな袴をつけ、女性悉とく白襟を畧さず、老祖父、老祖母を第一席にして、主人、次に嚴然として座に着けば、子女兄弟姉妹、かわる／＼威儀を正しふして新年賀正を申す此邊の趣味は、今や殆んど絶たり。夫れ、式は如何やうにとも變通すべし、希はくは、禮の意と、和の主旨とを殘して、此機會を、一家親族の尤とも輯睦すべき好時節となさんとを。

又、人に勸告し、もしくは激勵するの類、凡そ人心をして一更新せしむべきの談話を爲さんには、此年頭禮參の時ほど宜しきはあらず。古人多くは、斯の如くせり。今人の單に飮食をのみ事とし、徒らに目出度し〳〵とのみ空贊美せしとは異なる。

○何ものにおわしますぞ

人は決して絶對的のものならず、何ものかの前に立たざる可らず、而して、其向ふ所ろのものは、之が鏡なり。或ひは其姿をうつし、または、之に光を反射す。故に、尤とも切に此の鏡の何如なるものたるかを考ふることを要す。彼の德を脩め身を正しふすることを旨とするものに至りては、ことに此の一事を緊要とす。神の御前に立つか、自然界の前に立つか、己が良心の前に立つか、他の外見の前に立つか、もしくは極めて卑しきものに前に立つか。

○戀愛を詰りし人へ答ふ

戀愛とは如何なるものぞ、極めて明らかに、尤とも簡潔に說き示せよと、詰りたる人ありけり。われ答へて曰く、戀愛とは、聖愛を、好きなる人に對して發現したるものなりと。夫れ、聖愛の要素に三つあり、人の靈性を敬重することを知ること一也。人の靈性發達の進退遲速に喜憂を感ずること、二なり。此の發達の爲に決意熱心して盡力するの志を立つること、三也。以上、智情意の三つ相合して圓滿の活動を爲し、以て人の靈性の爲に盡すを、聖愛と云ふ。而して、此の聖愛は、何人に對しても均しく獻ずべきを理想とす。所云る、敵を愛せよと云ふの敎、之が爲めに存し、亦、此敎を奉ぜんことに熱意するもの、之が爲めに存す。故に、聖愛は「好く」てふことと同じからざる也。左れど、戀愛は、少しく之と趣を異にし、彼の聖愛をば、好きなる人に對して發現したるを云ふ也。先づ好きなる人に對して、此聖愛を發現せしめ、之より物の哀れを覺えしめ、至極の聖味を悟らしめ、以て理想に到着せしむ。戀愛は、此の故に重んずべきなり。故に、戀愛と聖愛とを混じ、又は、情慾と戀愛とを混ずる人、ともに誤まれり。一は、之を尊ぶに過ぎ、他は之を卑しむに過ぎたり。

新年の讀本（新刊書）

松村介石先生著

婦人のかゞみ

全壹冊美本
定價廿五錢
郵稅四錢

本書は女生が一生の方向を尋ぬる緒論より筆を起し、美人論にて終ふ。論ずるところ廿有題。凡そ女學生とし、妻とし、母とし、教師とし、記者とし、看護婦とし、獨身者とし、事業家として、學得修養すべき件々網羅して遺さず。要は婦人をして、萬界を通じて理想的たらしむるに在り。議論着々實際を穿つ。目下女界濛々霧深し、此書實に羅針盤たるべし。

目錄　緒言○女子の教育●第一生前教育●第二家庭教育●第三學校教育○智育○躰育○德育附女子修德の心得（一）修德を好まぬ人（二）修德に意を留めぬ人（三）修德を力むる人（四）修德を樂しむ人●第四經驗教育○男女交際論○擇夫論○妻の務○獨身論○事業論○姑媳論○養子養女論○婦人の大權○惡例○善例○美人論

星野光多先生編

修德養信 思想の林

一名日毎のさとり

全壹冊美本紙數四百頁
定價金五十錢郵稅六錢

古今碩學達德の宗教及び道德上高論卓說にして修德養信上非常の利益を得せしむべき聖思想凡七百餘項載せて此書に在り此書日々分讀の分として聖書の本文一二節と之を說明すべき聖思想一二項を加ふ而してその編成の體裁一に疊きに編者が著せし談林に同じ彼は宗教道德上實際的事實の茂林此は宗教道德上理想的聖思想の叢林讀者朝たに一日萬事を始むるに當り先づ此思想林の中の新思聖想を索ね以て一日養神防邪の資料となし夕に家族團欒するに臨み清話美談を彼の談林の中に取らば讀書の快默想の益蓋し非常なるべし

內村鑑三先生著

舊約貞操美談 路得記

全一册
實價十五錢
郵稅二錢

目次　第一段不幸の連續姑媳の苦別　第二段悲哀の極端寡婦の歸鄉　第三段攝理の教導貞女の謙退　第四段貧者の孝養援助の到來　第五段老婦の訓命禾塲の哀訴　第六段古代の相續新婚の證認　第七段喜樂の回復感謝の寡婦　第八段大王の血統賤婦の榮譽

是著者獨特の筆を以て舊約聖書中得路の記に註解を附せられしものなり、著者の緒言に曰く

路得記は實に聖書の女大學と稱すべき者なり、聖書の理想的婦人は從順の婦人なり、即ち權利を爭はざる婦人なり、而して余輩の見る所を以てすれば東洋の理想的婦人は反して聖書の理想と相符合するものにして、今日歐米に流行して稍や已に我國に輸入せられし西洋婦人の理想は明瞭なる聖書の教訓と矛楯する所多きが如し。

余輩之を云ふは强ち基督教の主義を曲げて我國在來の習慣と投合せしめんと勤むるにあらず、今日世に偏僻なる忠孝論者ありて國人を欺くことは掩ふべからざる事實なり、余輩は是等論者と和解せんとを勉むる者にあらず、然れども事實は事實にして人力の動かし得べきにあらず、歐米の風習必しも聖書の理想にあらず、我國の古俗必しも反聖書的にあらず、我等は事實と眞理のある所を探つて特世の流說に漂ふべからざるなり。

以て本書の特質を知るを得べし、是必ず我邦婦人社界の新讀本ならむ。

發賣元　東京新橋出雲町一番地　警醒社書店

賣捌所　東京神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

毎月(一回)十五日發兌

明治二十六年十二月三十日

評論

第貳拾號目録

發賣所

東京市神田區表神保町六番地

女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らず一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割增(五厘切手に限る)にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

東京市神田區表神保町六番地

發賣所 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日内務省許可
明治廿七年一月五日印刷
明治廿七年一月六日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治

印刷者 全 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光

發行所 東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社

印刷所 全 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工場 (電話十九番)